

である。此の人がコラン先生なのだ。先生は今仕事をしてゐたので手が汚れてゐるからと云つて、小指で皆に愛憎よく握手される。そして書室の側にある水道で、筆を無雑作に洗つてしまはれる。

書室には半書きあがつた、大きな壁畫が二三枚立て掛けてある。先生は其繪を指して裝飾畫だから普通の繪とは、描き方が違ふと云はれる。書室には其壁畫以外、何も目を喜ばすに足るものがない。書室も甚だ粗末なもので、到底長くそこに籠つて、繪を書いて居らるゝ様な處ではない。曾て寫真で見た歐洲の大家の書室の模様が頭にあるので、先生の書室も定めし快よいものであらうと想像してゐた處が、あまりに修飾してないので、少々勝手が違つた様に思はれた。

しかし、二階の書齋兼用の書室に導かるゝに及むで、これあるかなと思つた下の書室は、要するに唯ほんの仕事場であるのだつた。天井の高い書室の北側は一面のガラス張りであるから、雨天にも拘はらず、室内

は極めて明るい。他の三方の壁は、沈むだ色で塗られて其上に、古雅な東西の陶器、刀劍、各種の面、人形が廣い壁に、隙間のない位に多く掛けられてある。左手にある大きなガラス棚も、古器物で充滿されてある。色の寂びたエジプト模様の敷物が、何枚か敷かれてある其上に、三つの書架が据えられて、曾てサロンに出品されたことのある裸體畫が置かれてある。書架の右手にあるテーブルの上には、書狀や雑誌がごちやごちやになつて載せられてあつて、畫家の投げ遣りな氣質が窺はれる。裸體畫の一枚は、女が緑の草の上に腹匍ひになつてゐる繪で、赤味を帯びた臀部のあたりが、美事に出來てる。一枚は立木に凭り掛かつて、横を向いてゐる女で、描き方も、色も、調子もさつぱりした繪だ。一枚はやはり木に凭たれて、正面を見てる繪で、日光に輝いてゐる緑の草の色と、黄色を帯びた肉體の色とが、實に好い調和をなしてゐる。他に先生の妹を畫がいたものと、二十歳前後に描かれたといふ肖像がある。此の二枚は



(蓋)  
古い時の作だから、無暗に黒っぽい色を使つて浮き出る様に描かれてある。それと作風が變つてからの繪とを比較して見ると、却々興味が  
ある。

僕等はガラス窓の下に長椅子に腰掛けて、數多くの先生の繪の寫眞を見て、先生は非常に裝飾的頭腦に富むでゐらるゝとか、だからどれもこれも形にいやみがなくつてのびく／＼してるとか、小聲で話す。

先生は久米先生とK氏と共に力のつばをいぢくりながら、何かしら切りに話してゐらるゝ。先生の聲は太く、久米先生の聲は澁く、K氏の聲は黄いろい。

話してゐる中にいつか書室が暗くなつてきて、裸體畫がぼんやり見えて来る。時計を見ると六時過ぎだ。長き夏の日ももう暮に近いのだ。

溫味のある、快よい先生の書室に、少しでも長く止まつてゐたいが、あまり長座をしてゐるのも、心なき仕業であると思つて、我等は先生に御暇

を告げた。先生は笑を湛えながら亦來いと云つて、温かな大きな手を出して、一々握手された。

七月廿六日

セイヌ河畔を散歩していると、河に釣を垂れてる人と、書架を立て、寫生してゐる人とか、如何にもものんきそうだ。



セイヌ河  
の釣り

セイヌ河の兩側は、廣々とした並木のある通りで、河に沿ふて、四尺位の高さに疊むだ石の堤防がある。堤防の下に荷上げ場や、荷車の通行の出来る岸が續いて、堤防の處々にある石段より上下することが自由になつてゐる。そこで釣を垂れたり、繪を畫いたりしてゐるのである。

河船の往來繁き所、激しき音響の絶え間なき、大都會の中央を貫流するセイヌ河の様な所には、魚らしい魚は一疋もゐない様に私には思はれ



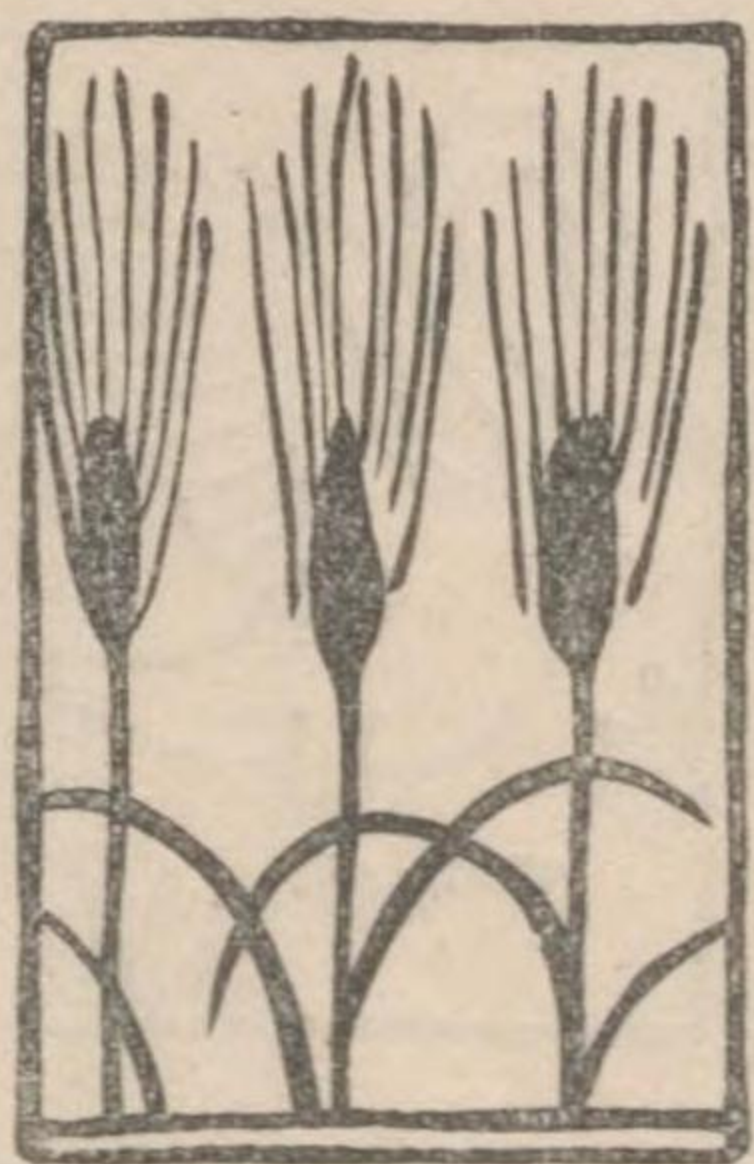
てならない。亦るた所でそんな大都會の真中、時は金と云はれてゐる所で、釣などしてゐるのんきものなんかやうとは思ひもよらぬことであつた。所が来て見ると、そののんきものゝ多いのに却つてあきるゝ位だ。私はどんなものが釣れるのかと、其側でちつと見てゐたが、中々釣れそうにもない。魚釣る人はどこの國でも氣長者と見えて、煙草などふかしながら、いつ迄でも同じ所で流れ行く浮木を眺めてゐる。そこへ亦見物が集つて来る。が其すぐ近くで繪を書いてゐる人の周圍には、人が寄らない、立ち止つて見てもすぐ去つてしまふ。魚の方は容易に釣れないが、繪の方はすすん出来てゆく。家が出来、橋が出来、橋上を行く馬車が出来る。それを見るより、釣れない魚釣りの方を見ているのが面白いのであらうか。

蒸汽船が通り、荷船が通る毎に、波にもまれて浮木が冠りを振りながら岸の方へ寄つて来る。河岸の通り、橋の上は盛んに馬車や自動車が行く。たゞましき音を立て、通る、人が大股で急いで歩く。シカシ、竝だけは別世界だ、煙草の煙がゆるやかに輪を畫いて上る。實際釣りをしていると、巴里に来てゐる氣がしない。

七月廿九日

田舎の町より東京へ行くと、電線電柱の多きに驚く。私はこれが都會の表徴かと思つた。所が世界の都巴里に来て見ると、一

電線電柱



向に電柱もなければ、電線も見えない。それでゐて、電話もあれば、電報もあれば、電報も打つことが出来る。電線がなくつても、電車は朝から晩迄走つてゐる。皆地下の装置であつて、あの目障りな電線や電柱がないから、市の體裁は極めて好い。こうなると都會の表徴も亦模様替へをせねばならぬ。



東京で自轉車へ乗つて疾驅して行くのを見ると如何にも威勢よく見えるが、巴里で自働車や馬車の走つてる間に、自轉車を見ると、憐れに見える。實際憐れに見える。

(六)

八月三日

巴里市中には、うるさい程便所が到る所に立てられてある。そして亦廣告がうるさい程、便所の周圍に張り付けられてある。其廣告はきまりきつて花柳病のばかりである。何時から何時迄診察に就事するとか、何回以上は割引をするとか、何の薬は何の病に最も有効であるとか、或よ見るもいやらしい、病で犯された皮膚の寫生圖などが張つてある。日本では、ビスマルクの肖像が毒滅の廣告に利用されてるが、茲では苦

共同便所



味走つたナポレオンの肖像が、矢張花柳病の廣告に利用されて、嗅い所へ曝されてある英雄こそ、好い顔の皮だ市内、到る所に便所の設けがあるに拘はらず、一寸横町へそれると立小便の跡が、そこにもこゝにもある。それを見ると、巴里人は能く水を飲むと思はるゝ。便所の設けの少ない東京で、少し位の立小便は、大目に見逃すべきだ。

巴里名物



朝ルクサンブルの公園で寫生してると三十位の女が二人僕の側へ来て、繪を見ながらパンを噛つてる。

八月十日

私は、立喰ひを巴里の名物の一に數へたい。立喰ひは、小供ばかりがするものと思ふと大間違ひ。八字鬚を生やし山高帽を戴いた立派な男が、大きな花の飾りのある帽子を冠つた女と、腕を組みパンを噛りなが

(七)



ら大道を樂しそくに散歩してゐる。女學生がチョコラとパンを喰ひながら登校するのは決して珍らしいものでもない。商店の前へ立ち止まつてそこにある鏡に向つて帽子を直したり衣紋をつくらつたりしながらパンを喰つてゐる女にはよく出會する。立喰ひの盛んな時は夕方諸會社學校商店の引ける時刻である。或るパン屋では其時を見込むで焼き立てふかし立てのパンを賣り出す。すると通りすがりのものが黒山の様に重なりたかつて遠慮もなく大きな口を開いて食つてゐる。老人もゐれば小供もゐる。男もゐる女もゐるのである。立喰ひを覗き見て百年の戀が褪めるなど、巴里では通用しない様だ。

八月二十日

貸畫室



午後四時頃英國より遊びに來たI氏を伴れてS氏とN氏とがやつてくる。

茶を入れやうかと云へばそれよりカツヘへでも行つてビールを飲まうと云ふのでソルボンヌ大學前のカツヘへアルクイエへ行く。まだ人の出盛る時分ではないが土曜日のせいか客も相應に見え音楽も初まつてゐる。僕等は通りに面した隅の方にあるテーブルを圍むでビールを飲み音楽を聞き美人を見ながら話した。

そこを出て四人はアトリエ探しに出掛けた。僕は初めどうせ短かい滞在であるから机や寢台や椅子を買つて畫室の中で自炊するのも面倒だからスフロイで過ごそうと思つてたのだが、巴里へ來て畫室生活の味を知らずに歸るのも残念なことだし亦一寸繪を畫こうと思つて



も、宿屋の部屋では、光線の取り方が悪くつて、モデルなどともうまい様には使ひない。でかたがた、畫室に住まうと云ふ氣が起つたのだ。四人は、ルクサンブルの公園の前を通りて、ボージラール街を注意しながら、ぶら／＼歩るいた。

此の邊は畫室の澤山ある町で、右側にも左側にも貸畫室のはり札が、四五軒行く毎にきつと目に入る。で其札を見付け次第、其家へ這つて先づ價を聞く。價があまり高いと畫室を見ずに歸るのだ。最もこちらから價を聞く前に、先方より一ケ年千法だとか、千二百法だとか僕等の様子を見て、どうせ畫室を見せても借りそうな人じやない、價だけでも云つて驚かしてやれ位の調子で、頭から嵩に掛かつて來るやつもある。そんな時には腹立たしいが、實際借りられないのだから仕方がない。御無理御尤もで引きさがつて來る。

ボージラールを左に曲つたとある横町に、鳶のからんだ畫室が、棟を列べて建てられてある所を見て、四人はこんな所に住みたいと云つて羨むだ。しかしそこには貸畫室の札は出てなかつた。場所がよくつて、室の好い所は誰も好いと見えて、あまり動かないのだ。動いてもすぐふさがつてしまふのだ。

英國から來たI氏は、英國にはこんな風雅な畫室はない。やはり巴里は藝術の氣に富むであると云つた。貸畫室は勿論藝術の氣の稀薄な我が日本に於て、よくも我が油繪が、あれ程迄に長足の進歩を遂げたものだと思つて、氣強い心持がした。

こんなことを話しながら歩いてるうちに、いつかモンバルナスの停車場の前へ來た。そこから近くにある、アカデミーコロラツシーやグラシヨールミエルの畫塾の邊を歩いて見たが、金を持つたヤンキーあて込みの大きな畫室ばかりで、適當なのがなかつた日本人に馴染みのカンパン、ブレミエールの方へ往つて見やうかとも思つたが、あたりが薄暗



くなつて来たのと空腹を覚えて来たのとで亦他日探すことにして、四人はある飯屋へ這入つた。

九月十五日

畫室生活



今日カンバーニユプレミール五番地の畫室へ移つた。

畫室とは云へ、少々な汚ない工場のようなもので人の住む様な所じやないのだ。でも部屋の北側は全部ガラス張りだし、天井も一丈に五尺位のガラス窓があるから、明るいことは非常に明るい、若し柔かな光線を得たいと思へば、布さへ用意すれば好いのだから、其點は自由である。僕は其光線の取り方と、家賃の安いので、一も二もなく茲を借り受けることにしたのだ。家賃は年に二百六十法だから、月に二十二法弱こんな安い

畫室は、巴里中どこを探したつてありやしない。少し位の汚いのは辛抱せねばならぬ。

左隣りは洗濯屋で、同じ棟続きの、同じ様な建物である。右隣りは八百屋の物置で、壊れたガラス窓より内を覗くと、空樽や空罎や野菜の包みが、ごつちやになつて積み重ねられてある。前は五階建ての家が聳えてゐて、畫室の天井の窓から、其四階五階に住むでる女工らしいものが、タッピートをはいたり、布を干したりしてゐるのがよく見える。

寢臺や机や椅子や、ランプや洗面器や其他のものを買つて来て、部屋へ列べて見ると、どうにかこうにか人が住めそうになつてくる。

カンバーニユプレミールの小さな通りには、飯屋もあれば、パン屋もある。理髪店、荒物屋、八百屋、牛乳屋、花屋、牛肉屋、繪具屋、靴直し所、薪炭屋、古道具屋、雜貨店、洗濯屋などがあるから、大概なものはずぐ間に合ふ。遠くへ買物に行かずに済ませらるゝから、至つて便利だ。



愈今日から、畫室生活の味が、味はるゝのである。

(七)

模範的畫室



九月十八日

僕の居る町の九番地の畫室と云ふのは、間敷が大小二百もあつて、畫室としては實に其尤なるものである。藤島氏、湯淺氏、齋藤氏、本保氏、鹿子木氏、山下氏、和田氏、小島氏、多くの日本人は曾つてそこに住むでゐた。コンシルジーに一人の若い娘があつて、或る人は其女を、手本にしたことなどもある。大分日本人には馴染な所なのだ。僕は夕方散歩して其前を通る毎に、モデルが一日の仕事を終へて畫室から出てくるのを見るにつけて、それらの人々が愉快に日を送つてゐた時の事を想つて、懐かしさに堪へない。

九番地の畫室を中心として、此町の兩側には畫室が澤山あつて、變な風



近附スナルパンモルガ、車働自合乗

直して來やうと思つたが、僕の廻りにはもう四五人の背の高い男が立つて見て居る。筆を忘れてくるとんまの畫家と、あとで笑はるゝのがいやさに、今更歸るにも歸られずと云つてパレットばかりを持つて、景色とカンバスをにらめてゐても、どうすることも出來ない。で窮餘の一策パレットナイフで書き初めた初め此の繪は薄く繪具を付けて畫く計畫だつたのだが、それも今は水の泡だ。繪を畫いてると、色々な人が來て、

(五)



僕の繪と僕の顔とを等分に眺めてる。此頃はいかに顔をしろ／＼見られても笑はれても少しも氣に介しない程、面の皮が厚くなつてきたから、初めて巴里に來た時の様にいやな感じが起らなくなつた。茲の人は流石に寫生と云ふことを心得てるだけに、僕の前へ立つて、繪を覗く様なことは決してない。皆離れて見てるのだから少しも邪魔にならない。畫家らしい人が二三人も立つてる時には、多少氣遅れの氣もしないではないが同時に若き日本人の腕前を見よと云ふ瘦我慢の勇氣も出て來る。盛裝を凝らせる女の美香を漂はせるときは、何か知らず氣が軽くなつて、ナイフが獨りでに動く様だ。

九月廿六日

市モデルの



朝早く起てモデル探しに掛ける。  
毎週月曜日、アカデミッド、ンシヨール  
ミエルの前にモデルの市が立つ、市と  
云ふのは多少語弊があるかも知らぬ

が、兎に角五六十人のモデルが其日に限つて集まつてくるのだ。年老いた女、小兒を抱いた女、若い女、若い男、三十年もモデルをしてると云ふ、白い鬚の生へた年寄りの男、各種各様の風をして、あつちに五人こつちに三人知り合同志で話してる茲に集まつてくるモデル——男や老人や小兒は別として重に若い女——の身なりはあまり感服したものでない。それに顔や形の好いのも少ない様だ、それも其筈だ、少しく顔が綺麗だとか、形が好いとか云ふモデルは、方々で引つ張り、凧になつてゐるからわざわざ市へ出掛けてくるには及ばぬのだ、そふ云ふ女は、これがモデル



かと怪しまるゝ様な立派な服装をして帽子なども流行を追ふて様々なものを冠つてゐる。

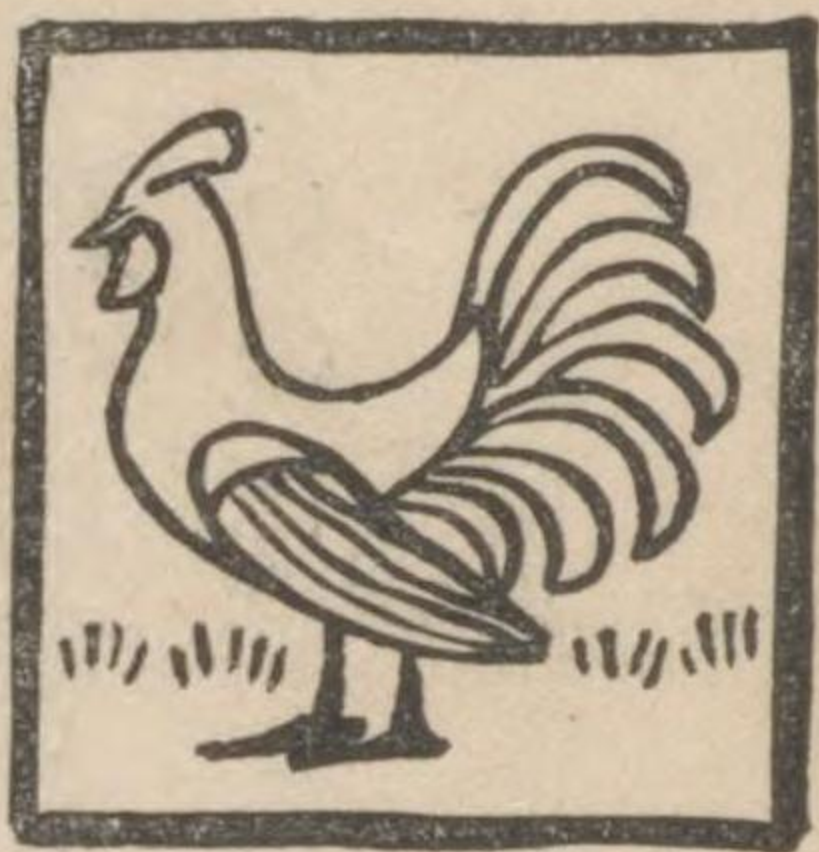
さて僕はそこに集まつたモデルの中から好きなものを選ぶのだが、一寸でも畫家らしく見える人が彼の連中に近づくと、大勢の者がすぐじろじろ注視し初める、誰れを選ぶのだらう自分を認むてはくれないのだらうかこんな考へで、僕が右へ往けば、大勢の者の目は右の方へ向く、左へ往けば左へ向く、そう注視されてる中で、あの女は顔は好いが體が短かいとか體は好きさそうだが、顔が氣に喰はないとか、肥えてるとか、痩せてるとか、落ち付いて見定めただけの勇氣が、初めはどうしても出ない、折角探しに出掛けたのだが、僕は他の方へ反れて、ほしくもない雜記帳を買ひに或る店へ這いつた。そこを出るなり直ぐ家へ歸つて煙草をふかし始めた。そして僕は自らの勇氣の乏しかつたことを、ぢれつた、く思つた。むこうは備はるゝ身だ、僕は備ひ手だ、何の遠慮があるもの

か、そう引つ込み思案ばかりした日には一日だつて外國に居られやしない。僕はそう思ひ直して、再び探しに出掛けた。カンバーニユ、ブレミエールより、モンバルナスの通りへ出てアカデミーへ行く途中、僕より前になり後になり、僕の方をちろ／＼見ながら歩いて行く女に遇つた。女の風より推して必度モデルだと思つたが、まづい女だから知らん風をしてると、其女は、市の所で立ち止つて他の者と一所になつた。確かにモデルだつたのだ。彼は僕がスケッチブックを持つてゐたものだから、僕のことを畫家と見て、備つてくれないか知らと、僕の氣を引いて見たのだらう。

今度は些の躊躇もせず、直ちに目指す女を得た。當つて見れば何のこともないのだ。



廣告繪



九月廿八日

(六)

僕は巴里へ來たら、愉快な廣告繪が見らるゝことゝ、樂むでゐたが、來て見たら實に其案外なものに呆れた。各種の廣告は、到る所に張り付けられて、人の注意を引きつゝあるが、唯目に付くと云ふだけで、少しも快感が起らない、快感どころか悪感をさへ催はしてくる。廣告繪の多くは何れも赤や青や紫や黄や黒や生々しい強い色を、べた／＼塗り付けたものばかりで、意匠の面白味や色の取り合せの氣のきいたものなど、藥にたくもない、藝術を以て誇りとしてゐる巴里で出來た、廣告繪とはどうしても受取れないものばかりだ。スタンランやムツシヤが筆を廣告繪に揮つた時代は、既に過去のことだ。此頃は筆者にも重きを置かないし、印刷にもあまり金を掛けないで、濟ませやうとしてゐる遣口らしい。僕は先年和田先生が持ち歸つた様な廣告繪を集めやうとして廣告繪

體をした畫家先生が絶えず出入してゐる。

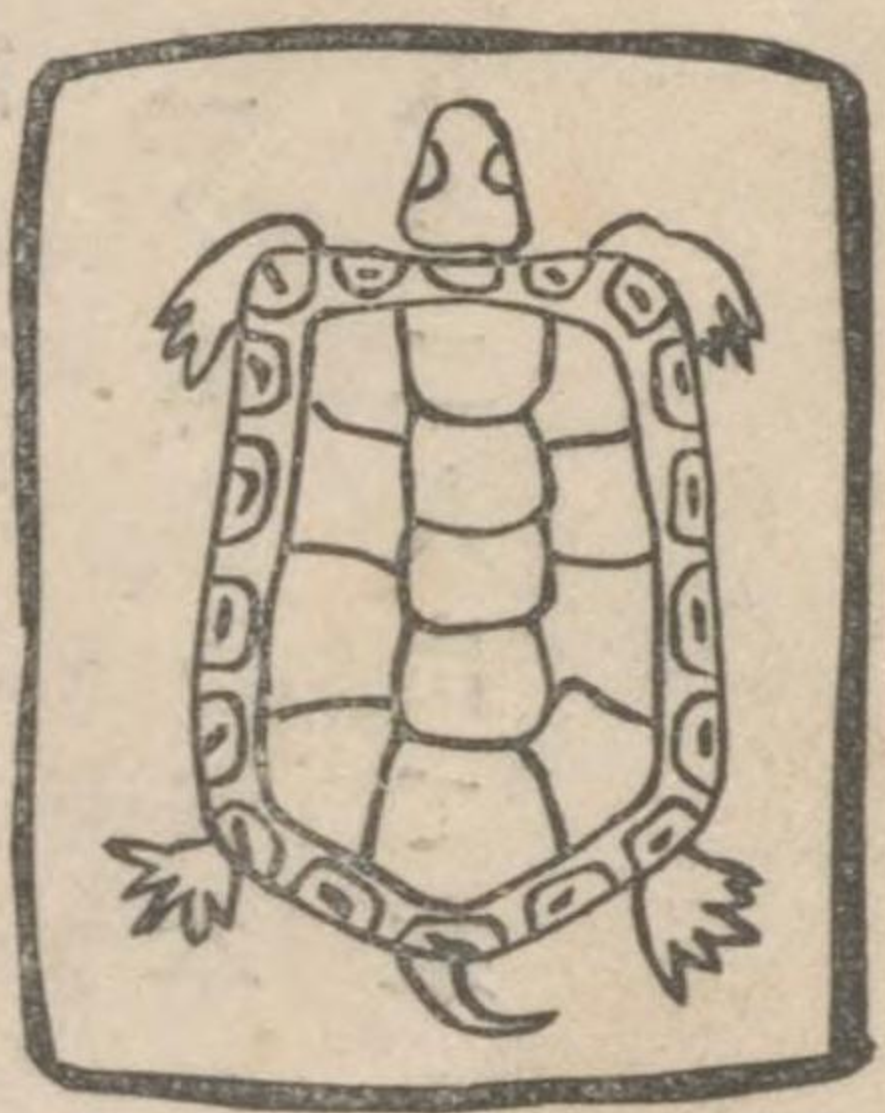
九番地より少し南に往つた所に、目下畫室が新たに建築されつゝある。其畫室は水道、電氣は無論のこと、アッサンストールで上下することが出来る。蒸氣が部屋々々に通つてゐて、畫家は自ら石炭いちりをしないでも自由に部屋を温むることが出来る。畫室には別に附屬の部屋が一つあるのだから、畫室としては實に申分のない畫室なのである。通りに面して大きな廣告が、人の目に付く様に立つてゐる。其廣告文に曰く、模範的畫室。

模範的畫室でなくつても好いさゝやかな畫室でも好い。貸畫室の一ツや二ツは、もう日本でも建てゝも好い時期だらう。そつういふ特志家の一人や二人、出て來る時も今ではなからうか。

(七)



頁惜み



九月十九日

(七)

此の構へにある便所の汚ないのにはいかな僕でも辛棒し切れない。で近所のモンバルナスの停車場の便所に往つて見たが、そこもやはり同じ様な汚なさだ。仕方がないから

十五文の有料便所で用を済ませた。これから毎日便所の爲めに十五文宛費やしてた日には月に約一圓八十錢高價な便所料になる。何とかせねばならぬ

午後ルクサンブルの立木を描きに行く。位置を極めて、畫架を据え、パレットの上に繪具を出していさ寫生に取懸らうとしたら、筆がない。しまったことをした。確に繪具箱の中にある者と思つて居たのが誤り、昨夜筆を洗つて、筆立に差して置いたのを忘れてゐたのだつた、畫家が筆を忘れて來るとは何たる不仕末な話だらう。一旦家へ歸つて出

を賣つてる所へ往つて見たが其拙劣な圖案を見せられたのに閉口して、今では廣告繪を集めやうとも思はなくなつた。胃活や次亞麟の廣告が、東京の市街を更に醜く、してゐるのを見て、僕は重ねて俗惡な廣告繪が、藝術の都巴黎を汚しつゝあるのを見て、市内廣告取締りの必要を、痛切に感じた。

十月十八日

○氏 N 氏 F 氏と共にモニコへ行く

巴里に於ける劇場寄席は大概夜の十二時頃には閉場する。其閉場する時夜の十二時から開く寄席？カッヘーがあるとは、日本で聞いてはまるでうその様な話だ。僕は其巴里

の名物を覗きに今夜友人と共に出掛けたのである。

(八)

カッヘー  
モニコ



9  
ト



僕等がカツヘーバンテオンを出たのが、丁度夜の十二時頃である。もう其頃になると、さしも賑やかであつたサンミッシェルの通りも、寂しくなつてくる。が流石にオペラの附近は行き來の人で雑踏してゐる。

(六)



其大通りを横切つて、モンマルトルの土地へ這入ると亦更には賑やかで俗風ある。僕等がモニコへ着いて楷子段を上つて行くくと、柝子木の

音の様なものが急に聞えてくる。今スペインの踊りが始まつたのだから急げと、様子を知つた一人の友が云ふので、僕等は駆け上つて部屋に這入つた。部屋に入ると白晝を欺むく電燈の輝きと、強烈な赤の色彩に打たれる。

あまり廣くもあらぬ部屋の中央に踊り場があつて、其側に七八人の樂師がある。踊り場の周囲は椅子テーブルでぎつしり取り巻かれてゐる。そこは客席で酒を飲むだり飯を食つたりする所なのだ。客席の背後、壁面にはいくつも大きな鏡が掛かつて、鏡と鏡との間には、赤い大綿の幕が垂れ下つてゐる。床に敷かれてある布も赤で、椅子も赤、樂師の衣服も亦赤、女の頬も赤く彩どられ、頭に差したる花も赤い。

踊り子は大概スペインの女で、スペイン特有の踊りを踊る。其踊りが済むと例のダンスが始まる。樂の音が高調になつてくると、遊びに來てゐる人もたまらなくなつて一所に踊り出す。どうせこう云ふ處に

(七)



来る位の人は唯のどんがらがんでないのだから、外で見られぬ位踊りに踊り抜く、テーブルをたたく、コップをたたく、シャンパンを抜く、笑ふ、歌ふ、聲が入り亂れて騒々しい。閉ざされたる室内は、煙草の烟と酒の香でむせ返る様だ。

茲へも例の夜の女が、人の心をそよる様な装ひをして、テーブルとテーブルの狭い間、人と人との間を縫ふて行きつ戻りつ八方に目をくばつてゐる。そして少しでも笑顔を見せ様ものなら、早速側へやつて来て、カツヘーを飲ませよとか、酒が好いとかねだる。カツヘーや酒の間は、まだ好いが、そろそろ或方面の話を持ち出してくる。應じそうにもないと見ると、ふいと立つて往つてしまふ。で、亦別の男を探す。そういうものが入り變り立ち變りやつて来る。

踊りは止むことなしに續けられ、音楽も亦絶え間なく奏される。各所のテーブルの上には、シャンパンの罎が何本となく並むで、料理の皿は形付けられても、シャンパンの罎は依然としてテーブルの上に飾られてゐる。茲へ来てシャンパンを抜くのは見得の一つである。其誇りの名残りとして、取り方付けられぬのであらう。踊る人も、樂師も、勞れ切つて其手を止めた時分は、もう朝の六時である。外へ出ると冷やかなシツとりとした朝の空氣は、快よく顔に觸れる。

十月廿三日

異色ある  
展覽會



サロンドウトンヌを見て面白く思ふのは、自由の空氣が漲つてゐることである。鑑査審査と云ふことを頭に置かずに自個の趣味によつて、勝手氣儘の製作をしてるのが面白いのである。鑑査審査と云ふばこそ鑑査も樂に通過したい、審査にもうまくいつて賞に與りたいと云ふ氣が出て、自個の衷心からの要求以外、或るものが手傳つて、所謂展



覽會向きの繪畫が殖ゑて行く。所が茲にはそう云ふ氣分が少ない。此の團體の人々は、今迄の繪畫以外更に新たなる方面に向つて進まむとしてゐる。そして其進まむとする路が見付からず、切りに其進路を探しあてゝる形がある。だから色々な人が各種の研究製作を發表して、少しも統一がない。統一のない所に極單な個人的の色別がある。極單な個人的のものそこに繪畫の興味があるのじやないだらうか。

總べてものゝ革新が企てらるゝ時は、突飛な意想外なものが出て來るのは止むを得ない、此の展覽會では殊にそれが目立つ様だ。例令ば油繪の中へ金銀を混せて描いて見たり、油繪で日本畫の墨色を出そうと試みたりしてゐる。其の點は丁度日本畫家が日本繪具で油繪の眞似をしてゐると同じ様な行き方だ。土佐繪の松や、光琳の花を此の展覽會で見やうとは實に豫想以外であつた。

各人各種各様のものを書いて更に統一がないとはいへ、そこに一大傾向を見ないわけにはゆかない。一大傾向とは粧飾的方面に向つて、多くの注意が拂はれてあることである。と同時に色彩の研究が益々精しくなつて來たことである。色彩を研究する上から、靜物が大分出品されてゐる。鮮かな色彩、強い色の取り合せ、全體を包む色の調子など甚だ快よいものがある。サロンドウトンヌを見て、唯怪奇呼ばはりをする人に私は賛成が出来ない。

極單な流  
行



十月廿七日

F氏と晝に牛鍋をつゝいてると、先達て傭つたモデルの友人がやつて來た。一所に飯を食はないかと云へば、一寸匙で肉をすくつて口に入れたが、

(九)





巴里風俗

(三)

すぐ吐き出してしまった。日本の醤油の味と香とが西洋人には不快なのであらう。で彼はパンと豚の監漬とを買つて来て食つた。  
 今氣が付いて見ると、房々として長く波を打つてゐた彼の髪の毛は無殘にも肩より短かく切られてあるので、どうしたのかと尋ねたら、こう短かく切るのが此頃の流行であると彼は平氣で云つてゐる。如何に流行であるとは云へ、婦人の最も

大切にしている髪を切つてしまふとは、實に思ひ切つた仕打ちである。如何なハイカラでも日本の婦人ではこの真似は出来まい。最も西洋人は帽子を冠るから流行が亦變つても、短く切つた髪の毛を隠すことの出来る自由を有してゐるのだから、そう一概には云へぬが兎に角日本婦人界の流行とかハイカラとか云つたつて、高の知れたけなものであると思はざるを得ない。

十一月一日

巴里にゐると、ナポレオン大帝の名を、到る處に於いて腦裡に印される。大帝が最も親愛せられし巴里は、亦大帝によつて、最も光榮ある紀念物を遺されてゐる。

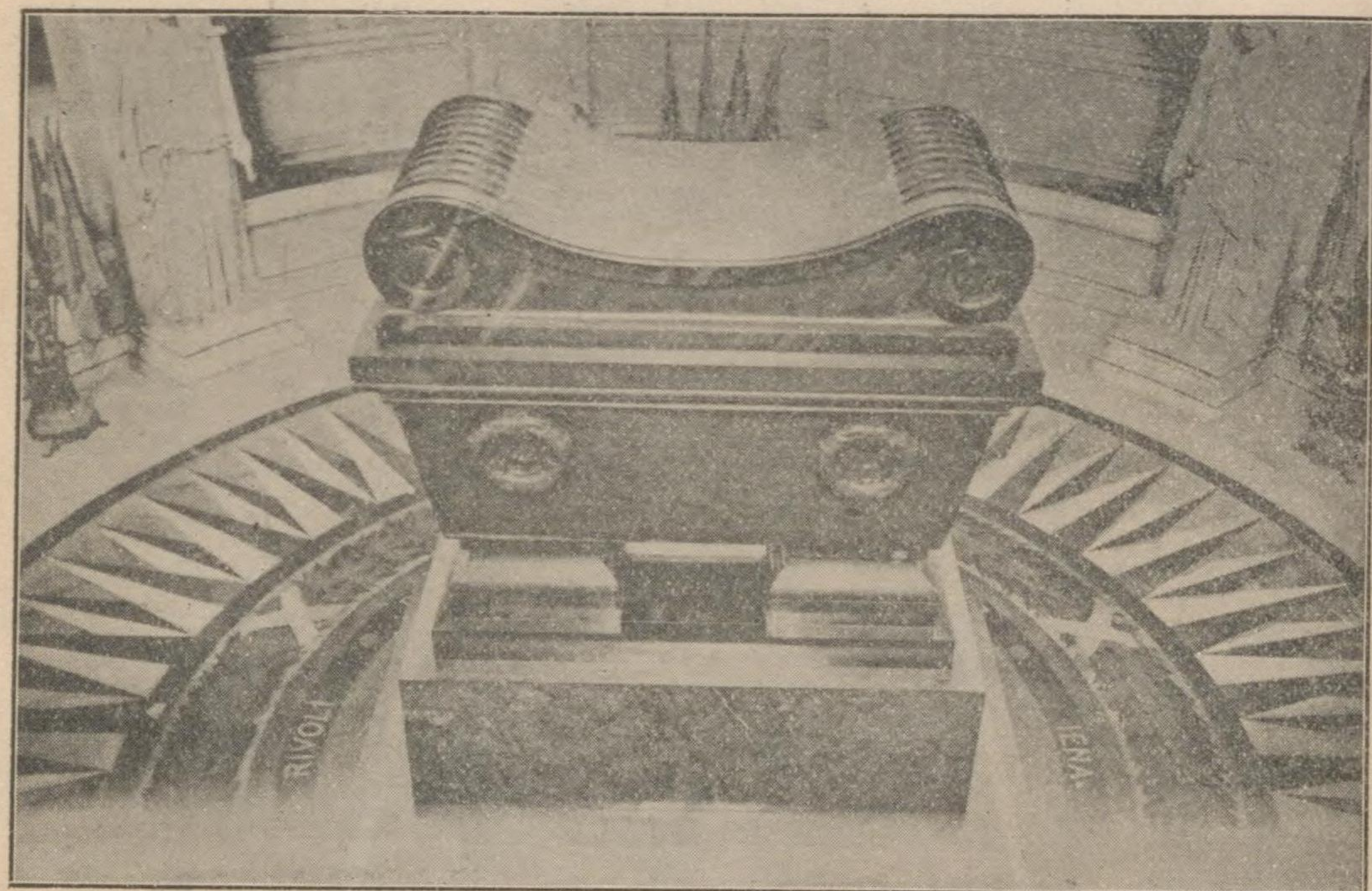
巴里と那翁



コンコルドの中央に立つて、南の方を望むと、緑滴たらんとする並木を

(三)

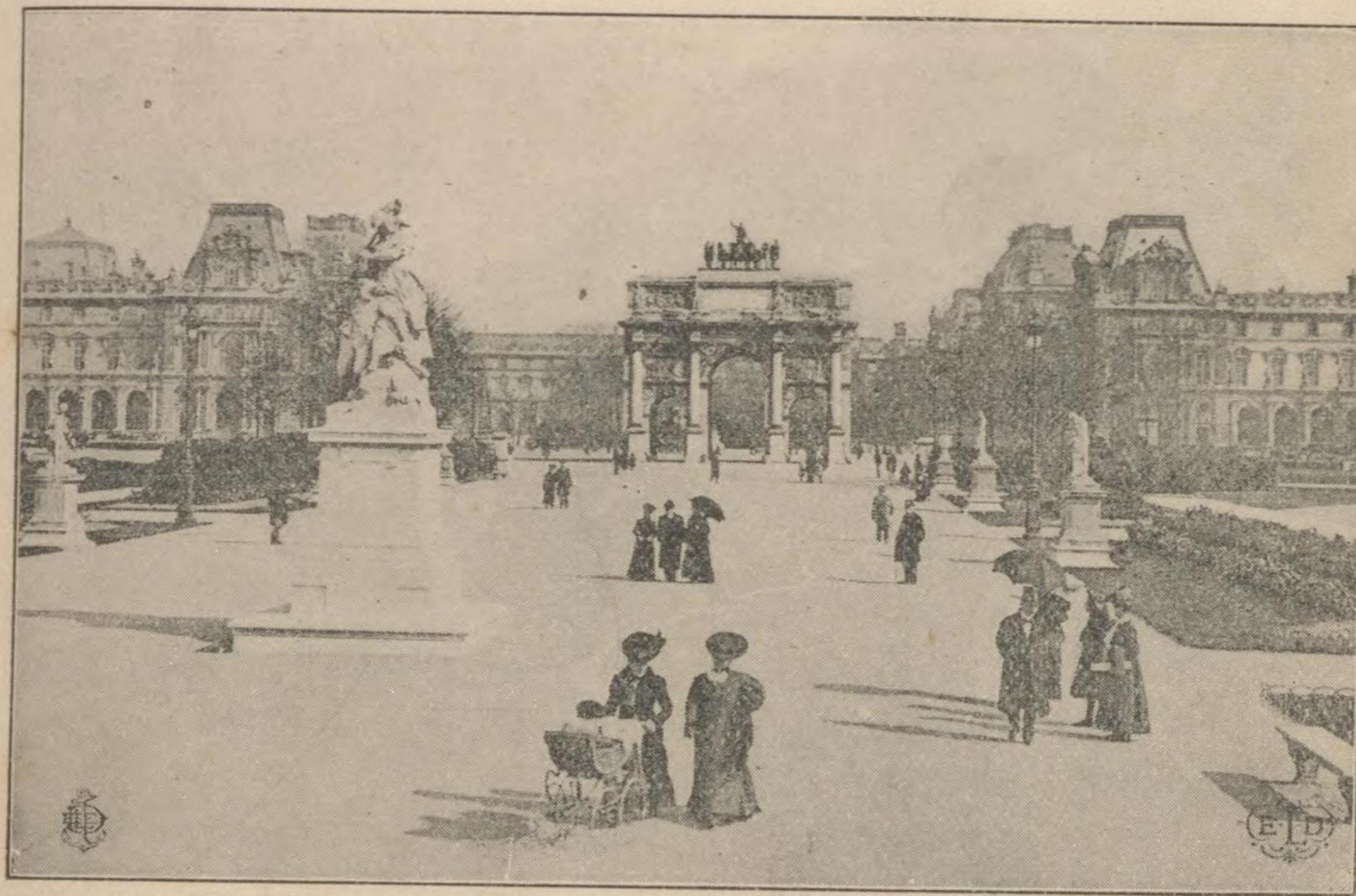




墓のンオレボナ

に大帝が伯林より奪ひ來つた、女神像が据えられてあつたが、後年獨佛戦争の際、伯林へ再び持ち歸されたと云ふことだ。ルーブルは大帝によつて大に造築せられ。帝の寶冠、劍及び珠玉は館内最も善美を盡したる部屋の中央に、特にガラス箱の中に收めて陳列せられてある。大剛石其他稀有の寶石によつて裝飾せられたる、寶冠、劍の美麗なること、人工の極みを盡してゐる。

(壺)



庭前のルブール

兩側にして、大木道が一直線にポアドブロン迄通じてゐる。其中央と覺しき所に、大帝の築ける一大凱旋門は、巨人の如く聳えてゐる。凱旋門の高さ約五十メートル、長方形をなし四方アーチ形の門があつて、自由に通行が出来る。最も車馬は禁せられてゐる。門の周圍は大帝の經來つた戦争の彫刻で充たされ、其裏面は、戦死せし將士の姓名が刻り付けられてゐる。昔は門頂

(壺)



ダビッドによつて書かれた帝の戴冠式の油繪は、ルーブルにある繪畫の中で、最も大なるものゝ一つである。

同じくルーブルにあるメツソニーの畫ける、アルプス越の繪は、單に事跡を語るのみならず、繪畫としても、實に優秀なるものである。

オペラ附近に立てられてある帝の紀念彫像は、幅員は大きくはないが、高さ甚だ高く、天に冲せんばかりである。

奈破翁帽を被れる帝の肖像を利用したる廣告繪は、市街の到る處に見出され、甚だしきは、臭氣鼻を撲つ所にさえ張り付けられてある。

舊の王宮の跡ヴェルサイユに至れば、帝に關せる戰爭繪は、勿論、金の裝飾物々しき帝の寢臺が、昔の儘に置かれてある。

帝の墓はセーヌ河の邊りなる、アンヴァリードにある。鐵柵の門を入り、帽を脱して寺院内に進めば、床下の丸き凹みの中に、暗綠色の大理石の、長方形の棺が据えられてある。帝は其内に永久に眠つてゐるので

(六)

ある。棺の周圍は女神像と、分捕の旗とを以て裝飾されてある。橙黄色と紫色のステーンダグラスの飾り窓は、日光を通して白き大理石の床の上に、其影を落してゐる。紫の影には沈靜永遠の形を思ひ、橙黄色の影には功名富貴を思ふ。

十一月十七日

美術學校  
附近

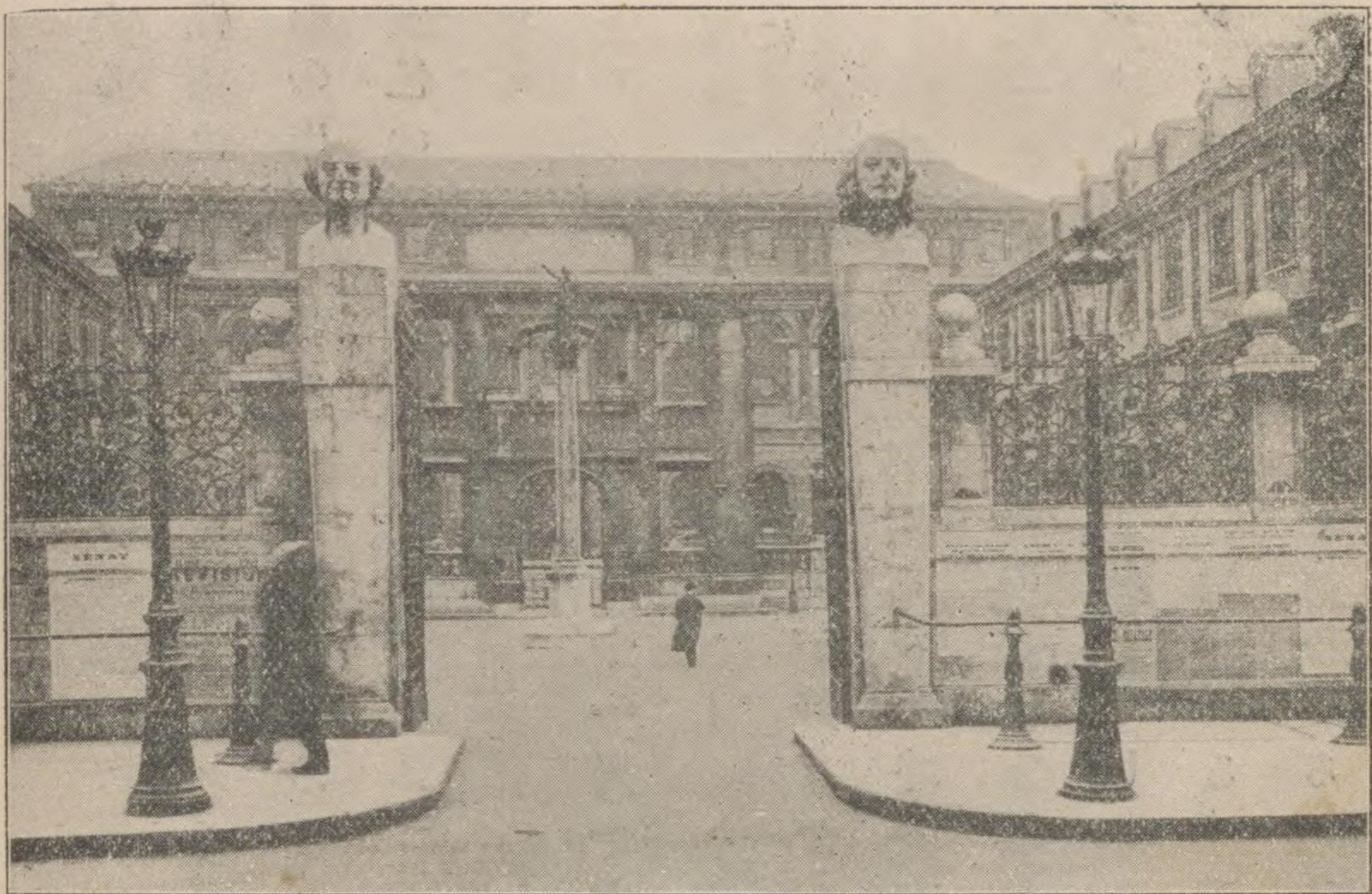


僕はルーブルよりの歸りに、ポナバルトの通りを歩くのが好きだ。

セーヌ河畔の古本屋を見ながら、美術學校の側面、各種の美術寫眞を販賣してゐる店の角を曲るとポナバルトの通りになる。其通りに入るとすぐ右側に、アメリカンアート、コンパニーと云ふ繪具屋がある。硝子越しに大きな裝飾用の繪具や書架、筆などが體裁よく並むでる。二三軒離れて皮表紙を作る店があつ

(七)





美 術 學 校

(九)  
 て、面白い圖案を施こした皮表紙の見本が出てゐる。其向側の裝飾美術品を商なつてゐる店では、何百法と云ふ椅子、机、敷物、窓掛の類が見られる。エジプト模様、澁い敷物には、しばらく足を止めらるゝ。皮表紙店より二軒目に、美術品を賣つてゐる店がある。そこには花瓶、灰落しの洒落たものや、タナグラの模造がある。其隣りは美術學校で、男女の學生が繪具箱を肩に掛けて、我こそ一流の美術家にな

るのだと云ふ様な顔つきをして出入してゐる美術學校に向つて眞直な通りリュデ、ポーザールには、繪畫や彫刻の寫眞を賣つてゐる。巴里に有數な店がある。店先に出てゐる、古代伊太利の石棺の一部分の彫刻の寫眞は、薄肉で簡単な線と、大まかな凸凹で出来てゐるのだが、實に立派なものだ。寫眞が鮮明なので、僅かな石の破損迄ありありと見える。其價を聞けば七法、價も中々好い。亦ポナバルトの通りへ歸つて、學校の前を通り過ぎると、右側にも、左側にも、繪畫彫刻の寫眞を賣つてゐる店が、連なつてゐる。それらの店は何れも、繪葉書を店頭一面に飾つてゐる。其繪葉書もありふれた美人や、風景のでなくつて、ホルバインのデッサンとか、シャバンの壁畫の下畫だとか、ミレーの鉛筆畫だとかを縮寫したものばかりだ。寫眞を賣る店に次いで、板畫を賣る店がある。板畫にも好いものがあるが、十五法も出さねばならぬのだから、一寸手が出せない。板畫を賣る店に限つて、よく古廣



告繪を賣つてゐる、廣告繪の賣買があるなどは、日本では夢にも見られない。學校より一町ばかり距れた所にブラアンと云ふ店がある。そこにある寫眞は皆好いものばかりで、安ものや繪葉書は賣つてゐない。バンテオンの壁畫を寫したものだ、殆ど原畫に接する想ひがする。ルクサンブルのミューゼーにあるコツテの雨降りの景色、眞黒な岩などよく撮影した者だと感服する僕が一法で買つた寫眞の比ではない。日本によく知られてゐる、ブランシユと云ふ繪具屋は、やはり此の通りにある。僕は舊くより、茲で出來た繪具を使つてゐたので、巴里へ來ても、使ひ狎れたものが好いと思つて、茲の繪具ばかりを使ふ。茲の主人は夫婦共中々愛嬌がよくツて、日本人に丁寧にしてくれる。K氏O氏はW氏N氏を知つてゐるか、と云つては、一々僕の顔をのぞく。佛國へ來ては佛語が必要だから、勉強なさいなど親切に言つてくれる。此店より三四軒行くと、サンジエリマンの大通りになる。

ポナバルトの通りは約三町位の長さしかない。そして道幅が狭いから右側より左側、左側より右側と好きな店の方へ寄つて、覗きながら行くのに都合が好い。僕等が此通りを歩くのは、丁度女が、呉服屋の澤山ある町を通るのと同じ様だ。

十一月十八日

午後友人に誘はれてアカデミージュリアンへ行く。

アカデミ  
ージュリ  
アン



アカデミージュリアンは中村氏や、鹿子木氏がゐた處で、大分日本には知られてゐるアトリエである。

敷石が凸凹になつてゐる前庭を通つて、受付の側の戸を開けると、濛としてゐる烟草の烟を透して、つき當りに掛かつてゐる白い石膏像が目に入る。此の部屋は彫刻と繪畫との共通の部屋で、彫刻の部屋の方にはモデル



が一人、繪畫の部屋の方には二人ゐる。丁度今休みの時間なので、三人のモデルは裸體のまま、モデル臺に腰掛けて何か話してゐた。學生は學生で手眞似をしながら、煙草をふかしながら、聲高に話し合つてゐるのが賑やかだ。髪の毛を長くした、ビロードのズボンを穿いた大の男が、紙製の蝶々を飛ばせて遊ぶでる。蝶々が彫刻の部屋へ飛むで行くと、其男も紙を追つて、彫刻と彫刻との間を、首をすぼめて走つて行く。

僕が壁と云ふ壁一面に掛かつてゐる繪畫や彫刻を見てると、側へやつて來た一人の生白い男が、だしぬけにオハヨーと聲掛けて握手を求めぬ。午後のおハヨーはおかしい、けれどそれでも日本語を知つてゐるかと思ふと懐かしい。後の方がたんと大きな音がする、振り返つて見ると、誰か、腰掛を故意に倒したのだ。音に聞えた茲の畫學生が初めて見物に來た人を驚かそうとでもしたのであらう、がいたづらにかけては、敢て人後に落ちぬ僕等には、何の効目もない。

茲のアトリエは馬鹿に大きいので、いくらストーブを燃しても容易に暖たかくなならない。其暖たかくもない室で、モデル臺の上で四十五分間も、びくともせず、同じ形を續けてゐるモデルの勇氣は、實に見上げたものだ。無邪氣な畫家氣質よりも、モデルの勇氣を僕は買ひたい。繪畫の稽古よりも、彫刻の稽古を見る方が面白い。

モデルを臺ごとぐるつと廻すと、自分の彫刻臺も同じ様に廻る、始め正面を向いてゐたのが、今度は背部が見えて來る。ヘラで首の處より、腰の處迄ぐつと土を取り去ると、背骨のある凹みが出来る。土を盛り上げると尻のふくれが出来る。指先きで鼻の頭をさすつたり、ヘラで頭をた、いたりするのがおかしい。手本になつてゐるモデルは、それを見て、どんな感じがしてゐるだらう。

そこを出て二階へ上つた、先づ右の方の部屋を覗く。茲は今何もしてない。僕等は曾て茲で學びだつた日本人の、残して行つた繪を見て、す



別の部屋へ行くと、今モデルが臺の上へ上つた所で。茲でもオハヨ  
 ーを云はれる名前を問はれる、稽古に來ないかと云はれる。學生は相  
 變らず愉快そうだ。モデルが姿勢をしたまま臺の上から學生と話し  
 てる。頭は動かさないで、口ばかり動かしてゐるのだ。其態度が實によ  
 く狎れてゐる。下で見たモデルはひそばつてゐたが、此のモデルは立派  
 だ。色も好いし、形も整つてゐる。此のモデルに似た繪が、下の部屋にも  
 茲の部屋にも大分ある。餘程皆から氣に入られ、度々此アトリエへ來  
 るものと見える。

僕はモデルを見ながら學生の繪を見た。總ての學生は言ひ合せた様  
 に、同じ様な赤茶けた繪を書いてゐる。柔かい皮膚の女の體を寫生し  
 てゐながら男性的な、木彫の様な女を書いてゐる。それも二人や三人  
 なら同じ様な方面のものが出來ると云ふこともあらうが、二十人もゐ  
 ながら、不思議な位に皆の繪が一致してると云ふのは、僕にはどうも了

解が出來ない。

十一月廿二日

カシノド、パリには先達て中より日本の相撲  
 が掛つてゐる。日英博覽會に來た大碇の一行が  
 興行してゐるのだ。其一行中の事務員をO氏が  
 知つてゐるので、誘はるゝまゝにO氏と共に行

小踊子



つて見た。

藝人の出入する薄汚ない、曲りくねつた廊下を通つて、力士の溜り場へ  
 行つて見ると、力士は、鰻の巢の様な部屋へ毛布を敷いて、其上へ例によ  
 つてあぐらを掻いてゐる。其一行の力士には常陸山部屋などで見る  
 様な、生々した面魂は見られずに、どこか薄暗い影がただよつてゐる、賑  
 やかな話馬鹿げた話をして、其話の影には何となく寂しい感じが隠



れてゐる。

部屋へ這入つて来た一人の力士が、今舞臺では小女の踊りが始まる所だと云ふので、二人は舞臺へ行つて見た。まだ幕が開かないので、小さな踊り子は幕の隙間から客席を覗いてゐる。僕がそれをスケッチすると周りへどやどや集つて来て、御見せなさいと云つて覗く、果てはスケッチブックを取りあげて、舞臺の片隅へ寄つて始めから終り迄、一々引つくり返して見てゐる。やがて開幕の合圖があると、始めて踊るものは舞臺に列ぶ、其他のものは背景の間に隠れてゐる、僕等も其お仲間入りをする。舞臺では華やかに踊つてゐるのを見向きもせず背景の後では、一人の踊り子が小さな袋から菓子を取り出して、他の踊子と共にたべてゐる。自分等の踊る番が来るとあわて、菓子袋を放り出して、舞臺の人となる。

印象派の大家ドガの踊り子の繪を、何枚か見て面白いと思つてゐた僕

(106)

は、其繪のモデルを目の當り見て、更に深くドガの作品を興多く思ふ。

十一月廿八日



古寫真版

茲の(アカデミイコラロツシエ)筆洗ひの側にバノラマサロンのばらばらになつたのが何十枚か重ねて吊り下つてゐる。僕は初めそれを何にする

のかと怪むでゐたら、それは繪具を拭く爲めにするのであつた。時計が十二時を打つを合圖に午前の稽古が終つて、パレットを清める時にナイフについた繪具をよくそこらの壁になすりつける、それを防ぐ爲めに特に紙を吊るして置くのである。其紙がバノラマサロンなのだから驚く。僕は日本にゐた時其古本を高價に買つたことがある、そして大事にして見てゐた。所が茲へ来て見ると、それが紙屑同様にあつかはれてゐるのである。ラフハエルの聖母でも、ミレー落穂拾ひでも、

(107)

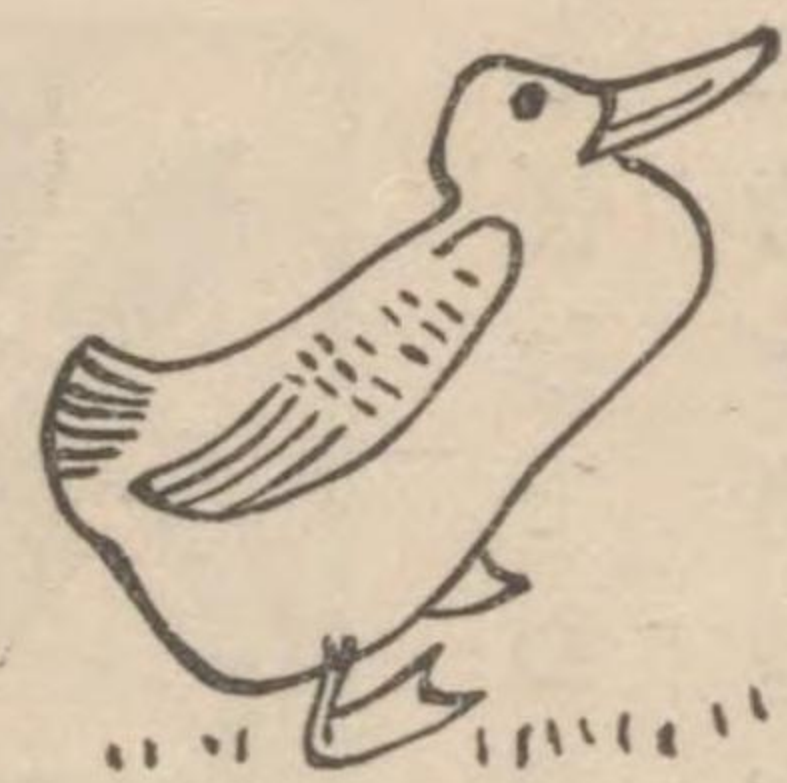


レンブランの肖像でも汚ない繪具をナイフで横なぐりになすり付けらるゝ。

同じ古本でも高く賣れる所、紙屑同様に取り扱はるゝ所、それ程迄に空気が違ふのかと、僕はつくづく思つた。

十二月十九日

踊子



朝八時頃ストーブへ火を入れた所へ手紙が来る。先達て約束した踊り子から來たのだ。午後だつたか、午前だつたか忘れたが、兎に角午後一時に往くから、用事がなかつたら家に居てくれとの文句だ。

午後一時頃正確に女が來た。挨拶が済むか済まぬに、彼はすぐ踊りの着物に着換え始めた。僕はまだ午後に書くとも、朝にするとも云はぬのに、先方ははや獨り合點であるらしい。實は此頃の様、に日脚の短か

(108)

い時には、午後は甚だ困るのだが、折角來てくれたものだから書くことにした。

彼は踊りを始めてから六ヶ年になる。今年十八でシャトレへ毎晩踊りの爲めに出勤するのだそうなる。快濶な女で、休みの間には、つま先きで立つて歩いたり、足を頭の上まで揚げたりして見せる。繪を畫くより煙草でもふかしながら、見てゐる方が餘程面白い。明日よりは朝來て貰ふことにする。

十二月廿一日

米國人



九時に來る筈なのが九時半になつた。彼は部屋に入るや否や、遅れて來たから十二時半迄使つてくれと云ふ。多くのモデル女は遅れて來ても、知らん風をしてるのが常だが、此の女はそう云ふ風

(109)



がなくつて可憐なところがある。

今日で三日デッサンに費してるが、どうもうまくゆかない。あなたはいつ迄繪具をつけないのですか、他の人は一日も形を畫けば、色に取懸るのです。米國人など殊にそうだと彼は云つた。米國人と云ふ言葉より思ひ出して、彼は米國の婦人に傭はれて行つたときの不平を云つた。曾て彼が時間より遅れて行つたときに、其故を以つて、いくら戸をたゝいても容易に開けてくれない、仕方がないので戸の外に、何十分か立つて待つてゐたそうだと爾後彼は米國人が嫌いになつたと云ふ。

僕は米國と云ふ土地を知らない、米國人に就いても知る所が甚だ少ない。だから好悪を云ふ限りではないのである。しかしながら僕には、米國と云ふ言葉は快よく響かない。米國と云ふ言葉を聞く度に、赤いネクタイ、油でびかびか光る髪の毛を思ふてぞつとする。僕の所へ來る女が、米國人が嫌いだと云ふ其意味が、僕の嫌いな意味と違つても違

はないでも、兎に角米國人が嫌いだと云ふだけで、僕にはうれしかつた。

十二月廿三日

如才ない  
女



此の女は曾てシャバ(ポール)シャバは佛國現代の大家、水邊の女を畫くに妙を得てる。其着想は清新、其筆は暢達、其色は鮮明、若い女の輕快なる動作がよく

畫かれてある(の)處へ長く傭はれたことがあるので、シャバを大層褒めてゐる。そして僕がシャバのキャラクターに相似てる所がある、可愛敬を振りまく。芝居に出てる女だけに、人狎れて、中々如才がない。妹も同處に出てる踊り子で、其内連れて來て見るそうだと。妹は年も若いし、顔も美しいから、自分の繪が濟むだらお畫きになりませんか、けれど我儘だから、眞面目にポーズをすることがどうかわかりませんが、云ふ。妹は家に居る時は始終人形いちりなどをして、無邪氣な愉快な



女だとシきりに廣告する。まだ一度も人の手本になつたことがないのだけれど、私が言ひ付けて、あなたの所へよこしましやうと云ふ。時間が來たら彼は、急いで着物を着換へて出て往つた。今日は午後劇場で踊りの稽古があるのだそうだ。

(二三)

四十四年一月一日

カッヘー  
にて除夜



昨夜はS、N、Y、D諸氏とカッヘービクトリヤへ往つた。目的は其處で除夜をしやうと云ふのであつた。

僕等の往つた時は、十一時少し前で空氣の流通の悪い室は、煙草の煙で朦々としてゐる。僕等は中央に陣取つた。ビールや其他の飲料を取り寄せて煙草をふかし乍ら話した。年末の景況は日本の方が面白いと云ふ事や、巴里の女の飾の巧い事など、すぐ前

や後にゐる女に就て話し合つた。而して話にあきると、唯ぼかんとして其邊を眺めて居た。

赤い服を着た、樂師の音樂につれて、二組三組のダンスが始まる。狭い狭い人の腰掛けてゐる其すぐ前で踊るのだ。ガルソンがビールを盆の上に乗せて其間を通る毎に、踊の手を引つ込ませねばならぬ程に、窮窟な處で踊るのだ。そんなに窮窟を忍むで迄踊るとは、餘程踊が好きなの國民だ、尤も樂の調子が、踊りでも踊つて見たくなる様な調子であるからかも知らぬ。

十二時近くには人が一杯で、遅れて來た人は、柱の側へでも立つてゐなければ居られない程人が立て込むで來た。

突然！電燈が消える、人がワーツと囃やす、何事が起つたのかと思つて、内に、室は又明るくなる時計を見ると十二時だ。もう千九百十年は終つて千九百十一年の新年を迎へたのである。電燈の消えたのは

(二三)



年の境目であつたのだつた。僕等は相顧みて御目出度う言ひ合つて、更に新たに飲料を取り寄せて、新春を祝福した。

一月三日

繪畫と年號



我國の洋風畫家が、其作品に年號を記すに當つて言ひ合せた様に皆西洋曆を使用してゐるが、そ

は何の爲めだらう。

洋風畫だから西洋曆を使用するのか、或は唯單に先輩の眞似をしてゐるのだらうか。まさか日本の年號を記すのが嫌いだと云ふ人はあるまい。日本の米を食ひ、日本の水を飲み、そして出來た繪に向つて、西洋曆を記さねばならぬ必要があるのだらうか。日本に年號がないならばいざ知らず現在に於ては明治と云ふ年號、及び建國以來の、紀元二千何百何十年と云ふ立派な年號がある。二つも年號があるのだから其何れを

使つても好い。更に西洋曆を使用するの必要はない筈である。同じく油繪と云へど、日本の油繪は西洋のそれと甚だ異つてゐる。同じ様な風に進むで行かうと思つてもそれは全然駄目である。思想風俗習慣の差異ある以上は、永久に同じ様なものは出來ぬ。出來ないと云つても、それは一向差しつかひのないことである。異なつたものが出來てこそ面白いのである。將來世界に誇るべき油繪が出來るとすれば、そはやがて日本の國民性の發露たる、眞の日本的油繪でなければならぬ。知らず其曉になつてもまだ年號を記すに當つて、西洋曆を使用するであらうか。

西洋曆を使用するのは、西洋崇拜の結果であるとも思はれる。一も西洋、二も西洋、西洋でなければ夜も日もあけぬ、西洋の事に就いて語り西洋の曆日でも記さねば、時勢の先驅者、新人でないかの様に思つてゐる事に原因する。之れは見得坊である。得てさう云ふ人に限つて、日本畫



(118)  
の興味や、變遷は知らなくつても、ゴーガンやマチスの話を聞きたがる連中である。鼻持ちがならぬ。已往は追ふべからず、以來は日本の年號を記したいと僕は思ふ。

一月四日

オペラ



SDと共にオペラへ往つた。

兩氏は前々日の切符を買つて置いたので平氣だが、自分は今晚買はなければならぬのだ。ONの兩氏は、迎も買へさうもないから行かないと云ふ、僕は買へるか買へぬか、當つて見ねば分からない、買へなければ其邊を散歩して來る迄と思つて、一緒に出掛けた。幸にして切符は買へた。

外套を預けて席に就くと、間もなく開幕前の音樂が初まる。

西洋の音樂らしき音樂を聞く經驗の少ない僕には、實に珍らしく感じ

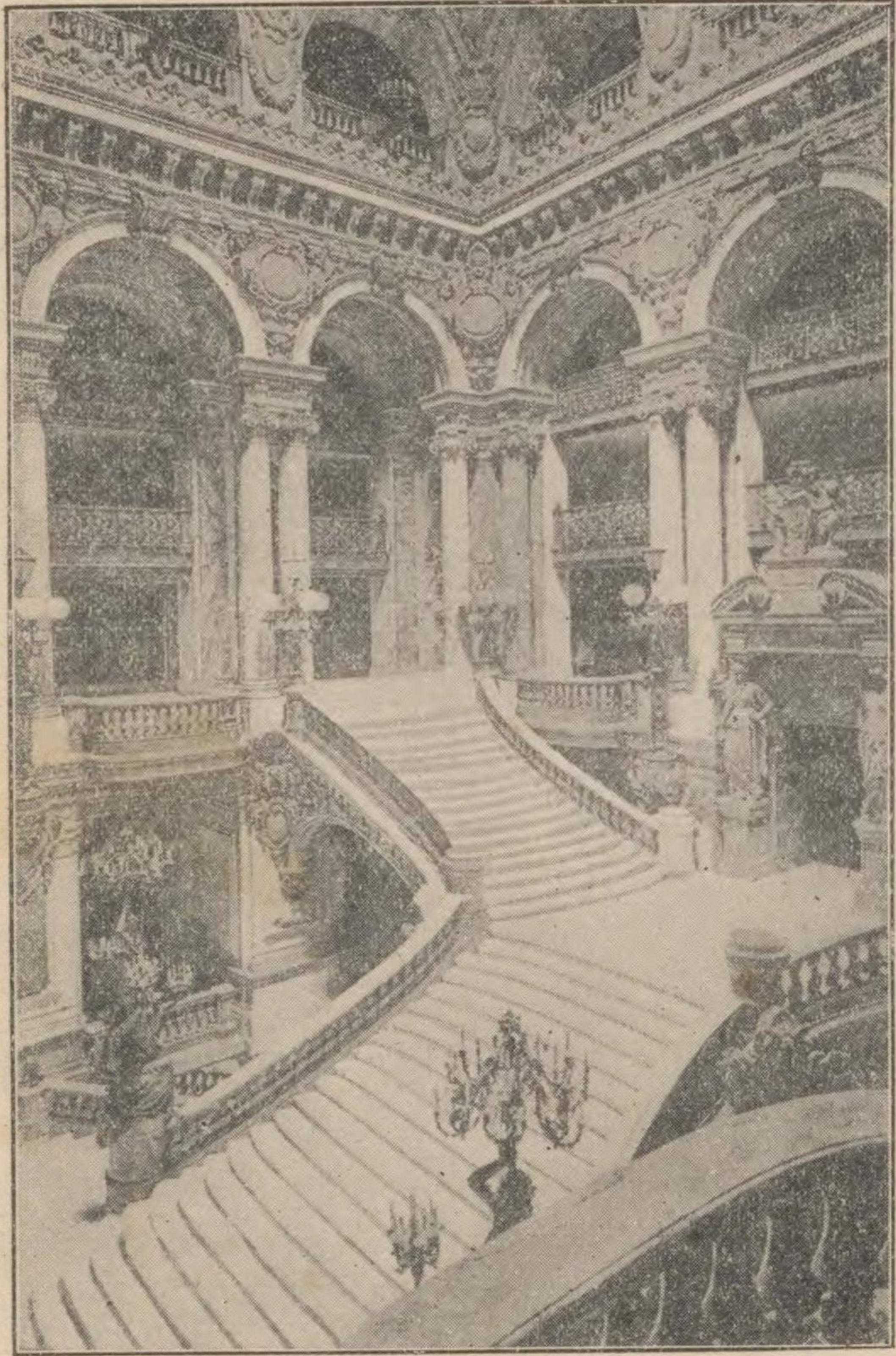
た、ホリベルジェーや、ムーランルージュのドンガラ、ビー、ビーの音樂とは非常な差だ、僕は唯譯もなくうれしく感じた。

首を擡げて天井を見るとまばゆきばかりの電燈が光つてゐる、電燈の吊るされる所は、壁畫の中央だ、電燈の爲めか何にか知らぬが、壁がよく見えない、唯變な男や女が手を揚げたり、足を延ばしてゐるだけしか見えな、壁畫や繪畫は場所、光線の選定が必要だ、亦それに依つて、畫風をも多少變ねばならぬなど、ふと胸に浮かむで來る、棧敷、柱、舞臺の周圍は總て金ぴかと、シツこい彫刻で、目まぐるしい。

歌劇が始まつたが、僕には何が何だかさつぱりわからない。しかし男も女も、音聲の立派なものには聞き惚れる。男の態度の雄々しさ、女の優し味、半ば裸體の女が體をかわす其時には、美しい線を書くのがたまらなく好い。それに色彩の調和がうまい。譬へば白い肉體には、濃い赤紫の色を用ゆるとか、黒い色の側には、淡い暖色を添へるとか、緑の着

(119)





オペラの階段

四人も腕を組むで長い裾を引きづりながら、軽く歩を運むでる姿はど  
うしても現実とは思へない。男はフロックコートにシルクハット歩  
るく毎に磨き立ての靴が、電燈の光を受けて、きらつ、きらつと光る。僕  
は茲にある壁  
畫を見やうと、  
そちこちを歩  
るいて居たが、  
側にある鏡を  
何氣なく覗く  
と、自分の飯食  
ふときも畫を  
書くときも散  
歩に出るとき

(二三)

(二二)

物の上には、白い薄布を被ふとか、そらろに人をして快感を起させる。  
或る人が綺麗な色は、田舎者の色彩で、濼い色は東京人の色彩だと云つ  
たが、色彩の人に興ふる快感と云ふものは、單に綺麗な色とか、濼い色と  
か云ふのでなくつて、要するに色の調攝如何と云ふことに歸する我等  
は其點を學ばねばならぬのだ。

背景も甚だ見事だ日暮に近くなつて來て、夕雲が赤く移り行くなど  
寫實の妙を極めてゐる。が背景と劇とを一所に見ると、一方は幽玄的  
一方は寫實的であるからともすると相距たらんとする傾向が見えな  
いでもない。僕はそこに何か調和せしむべき道がないものかと思つ  
て見た。

幕間の遊歩場の善美を盡くしたことは、オペラの誇りの一つである。  
と共にまたそこを美しい衣を着て散歩するのは婦人の見得とするこ  
ころである。膚の透けて見えるやうな色様々の薄い衣を着て三人も



もいつも汚れた同一の服曲つた靴古い中折帽見悪い顔形がはつきりと映つてゐる。とても晝の様に明るい中の盛装を凝した男女の内に立ち交つてゐる柄ではないのだ。自分は汚なくつても一向平氣だが汚い者のぶらぶらしてゐる爲に、多くの人の感興を殺ぐのは心すべきことである。と氣がつくと勢ひ隅の方に小さくなつて居ねばならなかつた。

二月八日

寫生と見物人



午後、テアトル、フランスの側で、廣告塔を寫生してると、見物人が夥だしくたかる。

茲は五六筋の路の交叉點で、ルーブルは直ぐ近くだし、オペラ街のつき當りには、大きなオペラの建物もあり、マガサンド、ルーブルと云ふ三越式の大商店や、其他巴里の土産物を商ふ店が櫛比してゐるので、人出の繁しい所だから、見物人のたかるのも無理のない

ことだ、殊に外國人色の黒い、背の小さい、見すばらしい服を着た男が畫いてゐるのだから、畫を見るばかりではなく、半ばは珍らしい人を見やうとする好奇心なのらしい、どうもそうらしい、だから繪を見ずに、僕の顔ばかり見てゐる人もある甚だしいのは、横から覗くのじやなくつて、僕の正面へ立つて顔を見てゐる人もある、それは男より女の方に多い、其程度廣告塔が見えなくなるので、筆を休めねばならぬ、若い綺麗な女ならまだ我慢も出来るが、婆さんや女工と來ては腹が立つ。

多くの人の中には、世話焼きもあるもので、大きな帽子を冠つた女が遠慮もなく前に立つて見てゐると、後ろの後からシャツポ、シャツポと怒鳴ると、女はきまり悪るげな顔をして、振り返りながら去つてしまふ、若いものは面白がつてどつと笑ふそれを知らずに、外の女が來ると亦シャツポ、シャツポと云つては大聲あげて笑ふ、見物人は繪を見るより、そんなことが面白いので、いつ迄もあるのだなと筆を動かしながら

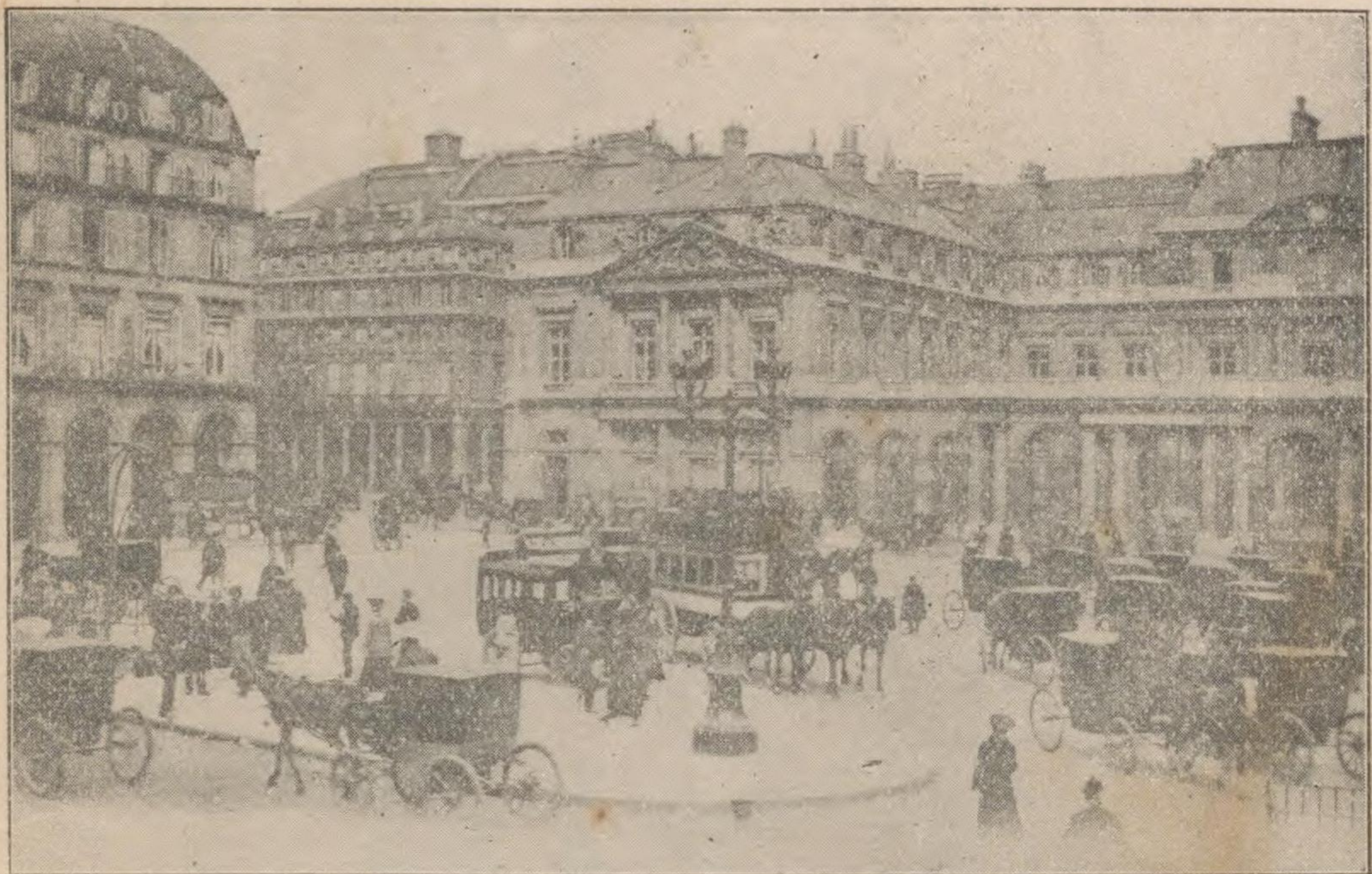


らそう思ふ。

僕の周囲には、シルクハットや山高の紳士、中折の好男子、烏打帽の若者、妻君、娘、學生色々の種類の人が、や／＼してしる。閑な巡査がのつそりやつて來てのぞく。こんな人通りの激しい所で、黒山の様に人がたかつてるのだから、どこやらの美術國なら、早迅巡査から、往來の妨害云々と云ふ廉で、退去を命せらるゝのだが、仕合せのことには、藝術の都、巴里の巡査は、見物人と一所になつて見てゐて下さる。のみならず、僕の正面に、立つ人を靜かに制してくれる。

巡査の立ち去つた後に、二人の若い女が僕のすぐ側へ來て、切りに見てゐる。あまり近くなので、ともすると筆先の繪具が、女の胸に付きそふになるのでは、つと思つては筆を引つ込めるのだが、僕の方から近寄つたのでないのだから、繪具が付いても僕の知る所じやないのだ。いつの間にか一人の女は、後ろにゐる男と口論を初めてゐる。どうも其様

(二三)



四 辻 の 雜 踏

子が後からいたづらされたのを、怒つてるのらしい。男の方は多勢で面白半分、其女をからかつてゐる。女は益むきになつて、口早に何か云つてゐるが、僕にはわからぬ。他の一人の女は時々連れの女に、加勢してゐる様だが、此の女は、そう一生懸命でもない様だ。そうこうする中に局面一轉、二人の女は小唄を唄ひ出す。軽く足拍子を取る迄はしやいでくる。誰か、どこへ投げたのか知らぬが、バレ

(二三)



（三三）  
ツトの上にマツチの摺りがらが落ちる。と年の少ない方の女が、白い手を出してそれを取つてくれる。僕は有がたうと云つて其女を見ると、黒い大きな帽子に、白絹を巻いた派手ななりをしてる。成程普通の女じやない人からかかはれるのも無理もない。小唄を唄ふのも御最もだと思ふ。何かの拍子に筆が落ちた、するとそれをも拾つてくれて、僕の顔を見て微笑を洩らす、拾つてくれるのは嬉しいが、大勢の前でそんな事をされるのはどうも氣まりが悪い。人から顔を見らるゝ様で。

兎角する内寫生は終つた。大勢の人、其女も僕が繪具箱の蓋をする迄、ちつと見てゐた。

二月十九日

ルクサンプルの公園へ往つて見ると、大人が小兒と一所になつて輪廻しや鬼ごっこをしてゐる。新聞や本を讀むでる。煙草



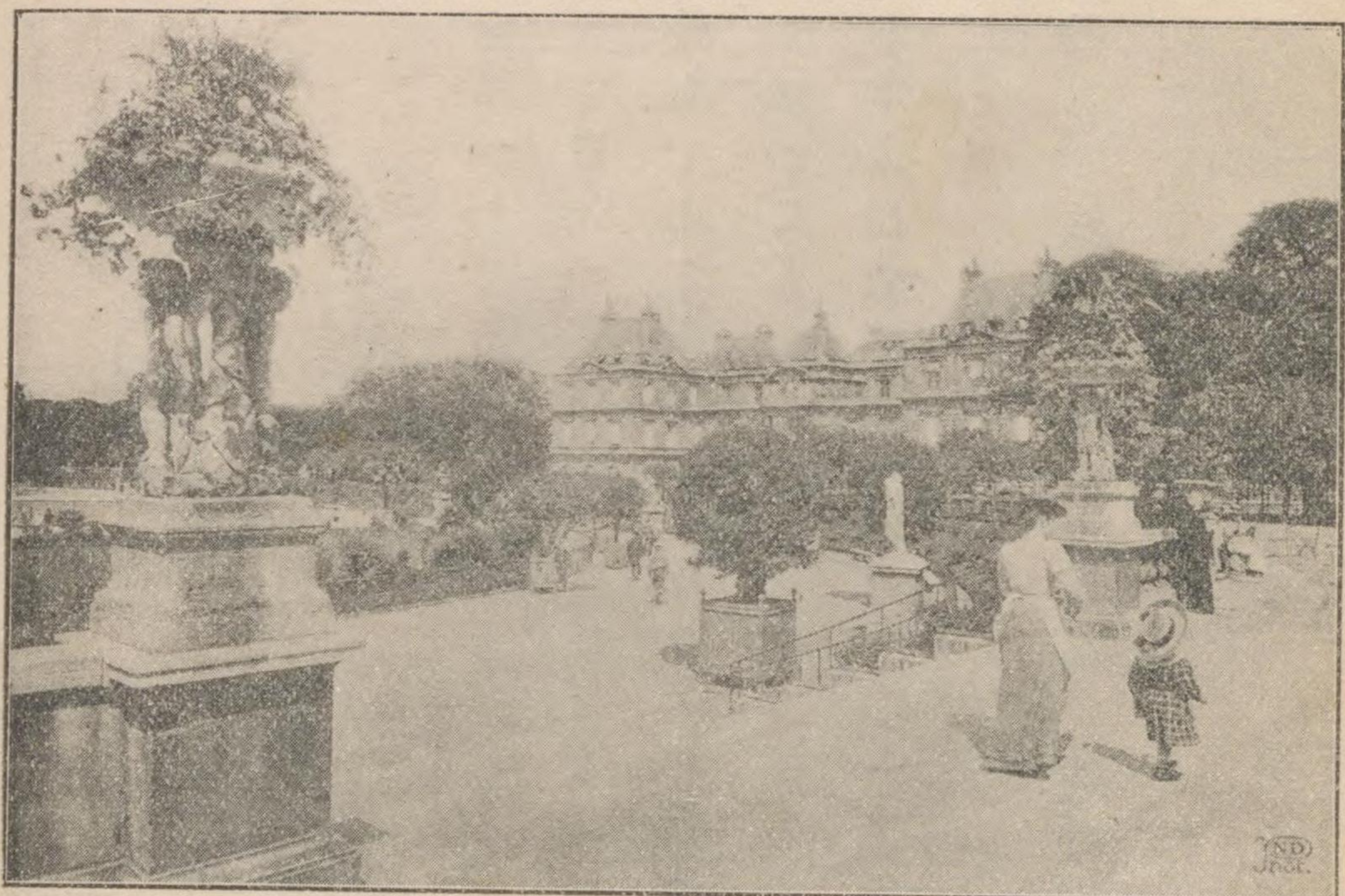
公園と住宅

をふかしてゐる。縫物をしてる。それを見ると公園と云ふよりも、どうも自分の家の庭で遊ぶ様な感じが起つて来る。實際そんな心持ちであるのかも知れぬ。これを上野の森や、日比谷の花園を、すーつと通つてしまふ人と比較すると、大分趣が違ふ。

日本人は公園を、自分のものゝ様にして遊ぶでゐない。他人の家の庭だと思つて、唯綺麗だと涼しいとか云つて過ぎ行く様だ。他人の持物だから公園がどうならうと、杉の木が枯れ様と自分達とは一向交渉のないものとしか思はない。他人の庭に長居するなど、以ての外なりだ。一般の人の心がこんな風では立派な公園など、いつになつたつて

（三五）





ル プ ン サ ク ル の 公 園

(三三)  
出来やしない。出来たつて、駆け足で通り過ぎるのでは曲がない。  
公園を自分達のものと思つてゐればこそ、樹木も大事にする。草花の一つも餘分に植ゑ様とする。彫刻も飾つて見たくなる。そうなると、ずん／＼公園はよくなるばかりだ。快よい所には長くゐたくなる。さればこそ公園は面白いのだ。どう考へて見ても、駆け足主義はよくない。

最も巴里の公園の立派で、日本の公園の發達しないのは、他に理由がないでもない。第一は經濟問題で、第二は住宅の相違である。  
巴里人の住宅には、多くは庭を持たぬ草花の鉢さい置く場所のない家が多い。それに家の構造が光線を充分に浴びる設備に乏しい。だから公園へ行つて晴々とした青空の下、緑の葉、紅や紫の花に心目を樂しましむる必要があるのだ。所が日本の家には庭のある家が多い。庭と云ふ程でなくつても、草花や植木の二鉢三鉢、列べて置く空地を大抵持つてゐる家の作りも、光線空氣の流通が悪くない。で自分の家で氣保養が出来る。わざわざ公園迄出向かなくつても、事は済むのだ。こんな事が、公園は唯市の飾り位に考へて、快よく遊び暮す所だと云ふ觀念の乏しい原因だ。





二月二十日

(三六)

今日はカンナバルの祭りの日だ。

二三日前より既に祭りの爲めに、色めき渡つてゐる。大通りの所々には、コンヒチー種々の色紙を細かく切つて

袋に入れたものを商なつてゐる店が、しきりに景氣を添へてゐる。早くも投げ合ひした其紙片が、そこゝに落ち散つてゐて、今日の祭りの日が待たるゝのであつた。

私はM.N.兩氏と共に、夕方より其祭りの賑はひを見るべく、グランブルバールへ出掛けた。例によつて私等は電車の二階へ上つて、街を見下しながら行く、私の所よりセバストポールへ行く途中、サンミツシエルの通り、茲は學生の多い所、カツヘーの多い所だけに、道の兩側では若い男女がきやつきやつと云つて紙片を打ち合ひして騒いでゐる。がまだ

火灯し前のせい、か、人出はそれ程でもない。

セバストポールへ着いた時分は、漸く電燈が輝き初めた時で、今迄蒼白く見えた人の顔も、赤く明らかに精彩を帯びて來た。常さえ賑やかなグランブルヴァールは、一層の人出である。私等は電車を下りてネベラの方へと志した。平生は車道を横切るのに、前後に氣を配つて、足早に通り過ぎる所も、今日は悠々として群集が歩を運むでゐる。と氣が付けば馬車も自動車も、今日は此の大通りを通らぬのである。

カンナバルの祭り、紙片を打ち合ふ戦は、もう散々に行はれたものと見える。落ち散つてゐる紙片は地上に三寸も溜つてゐる、人道と車道との罅の凹みも、唯一面の五色の紙片でうづもれてゐる。毛の敷物より、此の紙片の上を踏み行く心持が愉快である。

紙戦の様様を見るに人々は各一包、二包の紙片を用意して、行き當り次第、誰にでも打ち掛けるのである。しかし概して、男は女へ、女は男へ戦

(三六)

915  
H3

1891  
355



を挑みて、男同士或は女同士相戦ふは稀である。一人の女を数人の男が包圍して攻むるものもあれば四五人の女連れが、一人の男と散々に打ち合ふもある。紙片は四方に遠慮なく飛ぶので、相手を反れて思は



馬車通行の合圖

ぬ側杖を喰ふのもある。すると其人も亦だまつてはゐらず返しをする。と却つて側杖を喰はせた人が驚く、こうなると

(三三)

誰が自分の相手で、敵がどこにゐるのか更にわからなくなつて来る。人の間を抜けつくつたりつ打ち合ひ相戦ふ、小女の金髪にも、老人の帽子にも時ならぬ五彩を彩どる。

初め私等は相戦ふ意志もなく、唯ぶらぶら人込みの中を歩るいてると、後ろから女の聲で「モッシュュー」と呼ぶので、振り返るといきなり顔に、紙片をしたゝかに打ち付けられた。これはけしからぬ私等も紙を買つて置いて斯かる場合に備へねばならぬと、大に「コンヒチー」を買ひ込むだ。けれどまだ巴里の習俗に慣れぬ私等は、進むで人に戦を挑むのを躊躇する、で向ふから打ち掛けたら相手にならうと申合せて、亦人込みの中へ立ち交る。初めの程こそそうも思つてゐたが、一度紙片を握つて敵を目掛けて打ち合つてつからは、急に興味と、物好きと、厚顔と、勇氣とが一時に湧いて来て、今度はこちらから戦を仕掛け出した。でも現金なことには、年増や醜いものには一向に目もくれず、美くしいもの

(三三)



若いものにのみ向つて打ち掛ける。

かゝる雑踏の中にも、のんきな巴里人は、カッヘーの軒先きで煙草をふかしながら、カッヘーを飲みビールを飲むでゐる。其コップや皿の載つてゐるテーブルのすぐ側は、道行く人が肩々相摩してゐる。投げ合ひも盛に行はれてゐるのだが、それにもかゝわらず、落ち付き拂つて眺めてゐる。紙片は時々其人々の帽子にも飛んで来れば、ビールの中にも舞ひ込むで来る。でも推されてテーブルに打當る人もなければ、皿やコップの打ち倒れる恐れもない。私にはそれを快く應じた。更に私をして愉快な感を引きさせたものは、地に墜ちたる紙を拾ひ取つて、再び使用しないことだ。大道一面四寸も五寸も墜ち重つてゐるのだから、それを拾ひ取つて使つても好い様なものだが、しかし巴里つ子はそんなけちな量見を持つてゐない。

亦雑踏の中で、打ち合ひ投げ合ひつかみ合ひもしかねまじきにも拘は

らず、争論が更に起らぬ、これは互に相樂み相戯れても、決して自ら強がつたり、いらがつたりしないからであらう。斯くてこそ初めて眞に衆と共に事をなすに足る。

私等はグランブルヴァールより去つて、今度はモンマルトルのバルムーランルージュへ這入つた。いつもと違つて今夜のバルは實に物々しい。男が女の風をしたり、女が男の服を着たり、百眼様のものを顔に着けたり、野蠻人の眞似をしたり、各其好むまゝに意匠を凝らした姿で樂に連れて踊つてゐる。煙草の烟は室を籠め、化粧の香料と、酒の香は鼻を衝く。

十一時半頃再びオペラ附近の賑ひを見やうと思つてバルを出る。出て少し歩るく中に急に雨が降つて來たので、人々は右往左往に走つて行く。私等は小さなカッヘーへ逃げ込むで、雨止みを待つたが、雨は段段強くなるばかりで止みそうにもない。時計はもう十二時を過ぐる



二十五分である。此の雨ではいかな酔興なものでも、紙片の投げ合ひもすまい、私等は遺憾ながら引き上げねばならぬ。  
私は此時の雨を心から恨むだ。

(三四)

二月廿一日

活き活き  
したモテ  
ル



午後例によつてフロロイズが来るので、ストーブを燃して室を暖ためてゐたら、彼の女は室に這入つて来るや否や、熱い熱いと云つて裸になる、そして窓を開け放す。それでも尚ほ熱いと云つて、出入口の戸を開ける。そう方を開けては、外から書室内がすつかり見えるじやないか、で僕は外から見られるよと云つたが平氣なもの、見えても好いと云ふのだ。しばらくすると水が飲みたいと云つて、書室の外にある水道迄裸體のまま、コップを持つて行くじやないか、僕はあんまりだと思つて、着物を着て

行けと云つたら、自分の體は、あなたの着物なんかより立派だと云つて、威張つてゐたのには、驚いたねと、F氏が云つてゐた。

二月廿二日

石油とア  
ル  
コ  
ール  
と



S, N, H, 氏と午後三時頃、ガルモンバルナスの附近へ茶を飲みに行く。そこにある給侍女のもの、言ひ様顔形が、非常によく日本の女に似てるので、

N氏はまるで日本の女に會つて話してる様だと云つて喜むだ。  
薄暮書室に歸つて来て、ランプに火を點じたが、どうしたものか非常に暗い。シンを切らないせいで暗いのじやないかと、氏は自ら鉄でシンを切つてくれたが、まだ暗い。昨夜は明るかつたのに、急に今夜暗くしかとぼらないと云ふのは、どうしてもおかしい。四人で色々考へて見たが、やつぱりわからない。N氏は亦ランプのシンが古くなつたの

(三五)



だらうから、新らしくしなければ駄目だと云ひ出した。新たにするのはわけのないことだが、今既に薄暗くなつてゐるのに、そんなことをしてゐるのは面倒臭い。寧ろ遊びに出た方が氣がきいてゐるとS氏が云ふ。私は、石油の罎とアルコールの罎と同じ様なので、薄暗がりでも間違つて、アルコールの方を注いだのではないかと、ふつと氣が付いた。でランプの壺を嗅いで見たら、さうだつたので、四人は一度に笑ひ轉げた。さあ今度は其アルコールだが、石油が混じてゐるので、其儘アルコールの罎の中へ入れ替へるわけにもゆかない。一層のこと燃してしまえと云ふので、土間へぶちまけて火を點する。ぱつと燃え立つた焰は、晝室内に漲つて、四人の顔は眞赤だつた。

二月廿三日

無言の廣告



獨りグランブルヴァールへ遊びに行く。

兎ある町角に人が澤山立つてゐるので、何事があるのかと思つて、私も覗いて見る。そこには氣でも違つたかと思はるゝ様な人が一人ゐる。シルクハットにフロックコートと云ふいで立ちで、杖を持つてしきりに何かを指してゐる。そして口もあかず、笑ひもせず、眞面目な顔をして歩るき出し、亦立ち止つては群集を見、町の一方を指す。其態度が馬鹿々々しいので、群集は思はず吹き出してしまふ。

彼の指す方をよく見ると活動寫眞の看板が目についた。さうだ、彼は其廣告人なのだ。無聲の活動寫眞と無言の廣告人、好い調和だなと思ふ。



美術學校  
の火事



二月廿五日

(一三)

今日來た新聞に、美術學校の焼けたことが載つてゐる。焼けたのが美術學校でなくつて、二號館だつたらどうだつたらう。定めし有象無象の大美術家連中が、赤くなつたり、青くなつたりして、大騒ぎを仕出かすことだらうなどと思つては、微笑を禁ずることが出来ない。今の所日本には、美術品の展覽會を催すべき場所が甚だ乏しい。美術協會は光線がまるで駄目第一そこで展覽會を開くと何でも古くさく見えていけない。借席は初めからの建方が、會場向きでない。(神田の琅汗洞、京橋の吾樂は面白そうだが僕はまだしらない)で場所から云つても、建築光線の工合から云つても、二號館は展覽會場として、今の所最も適當な所である。それが若しくなつたら愚にも付かぬ。繪畫を陳列して、大家を氣取らんとする、美術家連中に取つては、大打撃に違

ひない。

けれども陳列場がなくつて、二三年間展覽會の開けないのも、或は美術界の爲めには、返つて好い事であるかも知れない。少なくとも僕だけはそう思ふ。何等の主義もなければ、特色もない展覽會賑やかな装ひを凝らして、團體の勢力を張らんとする展覽會が多過ぎる。これと云ふのも、美術家があまり早く、功を急ぐことに歸する。之實に寒心すべきである。

二三年間陳列會場のないことが、やがて天狗連の反省を促がす動機にでもなれば、我美術界の幸福じやないか。

(一三)





三月十日

僕はグランプルボールを散歩するのが好きだ。日中も好い。夜も好い。

巴里の最も広い通り、繁華な通りだから、各種の商店は、店飾りに最も多くの意匠を施してゐる。僕はそれを見るのが最も楽しい。

此の通りにある品物は、殆ど實用以外のもの、高價なものばかりだ。どうしてもなくつちやならないと云ふ代物じゃない。美しい男女の装身具、室内装飾品、華麗な贈答品と云つた様なものが、通行の人の目を引いてゐる。

鏡とガラスの巧みに使用されてゐることは、巴里中此の通りに及ぶ所がない。薄暮室内や道路の電燈が輝いて來るとガラスや鏡に其光が反射して、光彩更に加はる。

(一四)



巴里の大道

路行く人が鏡に向つて、ネクタイの曲つたのや、帽子を冠り直したりしてゐるのは、珍らしくない。女が通りすがりに、口紅を差してゐるのさい見向くる。上海、ホンコン、シンガポール、ペナン町では、鏡やガラスは殆ど見られない(外人の家は別)支那人の理髪店には、小さな鏡さへ備へてない。客は椅子に腰掛け、棒に凭たれて、髪を剃つてもらつてゐた。日本でも淺草や、四谷の通りより、銀座街は鏡と

(一四)



ガラスで美しい。それを考へて見ると、鏡とガラスは、文明の表徴でもあるかの様な氣がする。

(一四三)

羊 繪畫より



三月十四日

此頃繪を見るのがいやになつた。ループルへ往つて、あの滑つこい敷板の上を、氣を付けて歩るきながら、繪を見て歩くのが苦痛だ。隅から隅迄繪をギッシリ掛け列べてあつて、更にゆとりがないので、一つの繪を見てると、其左右の繪の一部分が目映に映り来て、わづらはしい。頭迄何かこう物に張りつめられた様で、堪え難い。ループルにあるものは皆立派な繪ばかりなのだらうが、どうも僕には名畫を味はつてる内に、既にもう勞れてしまふ。名畫を視て苦しい様じや、僕は遂に立派な畫家にはなれないかも知れない。

915  
H3

巴里より  
ロンドンへ



三月十七日

僕は此頃繪を見るより、田舎へ往つて、青草の上へ横になつて、羊の群を見る方が愉快だ。繪畫より色彩を學ぶより、商店を覗き歩く方が僕には利益だ。

私は此の日の夕刻巴里を出發して、ロンドンへ遊びに行つた。そして四月九日の朝巴里へ歸つて來た。此の間遂に日記を付けることを怠つてゐたので、曾て文章世界へ載せたロンドン雜觀を入れることにした。

○私は巴里に着いてから、彼是九ヶ月にもなる頃ロンドンへ出掛けた。其前にもしばしばロンドンにある友人から、早く來いと云ふ手紙が來たり、巴里にある友人がロンドンへ行くときにも、度々誘はれたが、出無精な私は何とか彼とか理窟を付けて、遂に一所に行かなかつた。華か

(一四四)



な巴里で好きなことをして遊んでゐる方が、煙で燻つたロンドンへ行くより、どんなに面白いかわからない。繪だつてさう見たかない。巴里にある繪を見るだけでも容易でない。數ばかり多く見たつて、さう頭に這入り切るものでもなし、畫風や作者の名を覚えて來て、法螺を吹いた所で仕方がない。こんなことを思つてゐたものだから、さう急いで行く氣にもなれなかつたのだ。けれどラフハエル前派の繪や、コンステブルの繪は始終見たいとは思つてゐた。殊にシヤバンヌ好きの私は、シヤバンヌが多大の感化を得たと云はれてゐるバルテノンの彫刻が見たかつた。で愈々歸朝の日も迫つて來た三月半、まだロンドンに霧で包まれてゐて、日の光りを見る日は稀であると云ふ頃に出掛けた。

○巴里を九時の夜行で立つて、佛國の海岸に着いた頃は眞夜中であつた。月のない暗い冷かな海岸の町の電燈が、ぼんやり光つてゐるのを見たときは寂しかつた。海岸に汽車が止まると、すぐ側に英國通ひの汽船は、煙をあげて今にも出發しさうに待つてゐた。知らぬ異つた人々と共に、眞夜中に汽車から汽船に移つて知らぬ國に行く、私は旅と云ふことをしみじみ味はつた。

○朝七時頃ロンドンへ着いた。成程霧が立ち籠めてゐて、總てのものがぼんやり見える。私は自動車を傭つて直ちに友の畫室を訪づれた。私の來るのを待つてゐた友は、熱いコーヒーをこしらへてくれた。友は汚ないがしかし廣い畫室の隅で、汚れた和服を着て、私の爲めに日本飯を炊いてくれた。

○私は友に伴られて毎日市中を見物して歩いた。巴里の乗合自動車には屋根があるが、ロンドンにはそれがない。だから雨が降つてくると、銘々洋傘を差し腰掛の側にある油紙を膝の上に蔽ふ、甚だ手數のかゝることだ。最もこれは二階であつて、下はどちらも同じ様な作り



である。其二階から町を見てると間の抜けた様な形の女が手を振りながら歩いて行くのが目につく。生れ付きかそれとも人工か知らぬが、巴里の女は、非常に胸が張つてゐて、尻が出てゐるので、形に變化があつて見心地が好い。所がロンドンの女は、一體に胸も張つてゐなければ尻もなだらかだ。だから首から下がすぼつとしてゐて、甚だ寂しい形だ。

○私は賑やかな町を歩きながら、商店の店飾りを見るのが好きだ。色彩の配列の巧みな店飾りを見るのは生半可な油繪を見るより愉快だ。店飾りの巧拙を見るのは婦人服や装身具を賣つてゐる店を見るのが第一番好い虚榮の權化とも云はれてゐる婦人を得意とする商店では、この國でも最も多くの力と金とを費してゐるのだから、それさへ見れば、その町、或はその國の趣味好尚がうかゞはれると思ふ。ロンドンのこれらの商店の店飾りを見て、實際私は好い心持になれなかつた。成

程金のある所だけに金目の懸つたものは相當にあるが、ものを矢鱈無精に列べ過ぎて、清楚とかゆとりとか、或は意氣とか云ふ分子には甚だ乏しい。殊に反對の色の調和で、人をして思はず快感を起さしむるものゝ如き、色彩の配列に於いて大に缺けたる所がある。

○ロンドンの霧は不愉快だと云ふが、僅かばかり滞在してゐたのでは、決して不愉快な感じが起らないのみか、反つて霧に包まれた市街が面白く見える。ロンドンの街は巴里の様に、家の構造、高さ、軒並が一定してないし、建物の色も個々別々であるから、市街の體裁としては立派ではないが、狭霧の中に、或は高く、或は低く、並んでゐるのが趣深く思はれる。そんな日の薄暮公園へ行つて見ると、淡い銀鼠色の森の中に、電燈が眠つたい様に輝いてゐて、夢の國へでも往つた様な心持がする。さてはテムズ河畔へ出て見ると、セーヌ河畔では見られぬあづき色の帆を張つた舟が、何處ともなく浮び來て、亦音もなく何方へか消えて行



く。何だか頼み難くない様な、自分も霧の中へ、舟と共に消え入る思ひがする。

(一四)

○ロンドンの美術館にある繪は、總べて硝子で蔽はれてある。ロンドンの様に霧と煤煙が、遠慮なくどしどし館内へ侵入してくる所では、繪の保存上どうしても硝子をはめなければならぬのだらうが、繪を見る人の不便は實に甚だしい。場所によると硝子が光線を反射して、眞と面より見ることが出來ないので、止むなく斜より見ねばならぬ。或繪には其硝子の面に、反對の側にある繪が影つて、折角見やうと思ふたものが、よく見られない。労働者の足元へ貴婦人の頭が影つて見えるなど、あんまり賞めたものでない。

○私はどんな繪が最も多く人の注意を引きつゝあるかと、注意して見てゐると、死に瀕しつゝある小兒の側に、心配さうな顔をした醫者がゐて、兩親が其後で目をしばたゝいてる圖とか、家庭の和樂の處とか、總べ

て説話的、教訓的、歴史的のものに人が集まつてゐる。英國の繪ばかり集めてあるテート美術館には、亦さう云ふ種類のものが多い。風景は風景畫らしいもの型に入つた様な構圖、おとなしい色彩、隅から隅迄丁寧に描かれてねば承知しない様なものゝみである。巴里では畫題より先づ、作者の名を大きく初めに書いてあるが、茲のは畫題が先きに大きく、作者の名は小さく其後に書いてある。私はこれを見て、巴里の人は畫題より先づ作者の技倆を見るに急にロンドンの人は技倆よりも先づ畫題に多くの興味を持つちやないかなと思つた。

○ターナーとコンステブルとは、英國の最も誇りとする所の風景畫家である。ターナーの名は佛國のミレーの様に其作品の模寫と共に、日本人にはよく知れ渡つてゐるが私はターナーのものよりコンステブルのものゝ方が好きだ。コンステブルの作には、謹嚴な筆致、精到な觀察、光線の取り扱ひに巧妙な所がある。殊に驚異すべきは、人言

(一四)



鶯色の風景書をなす時に當つて、獨り現實に生き、實際のものを觀取して、日光に照り輝ける綠樹を描き、或は水蒸氣を描き、澄み渡れる青空に白雲の去來するを描く。佛國近代の自然派や、印象派の先驅をなしたるものは實にコンステイブルである。(一七七六—一八三七)私のコンステイブルに最も推服してゐるものは、色や光や筆力も無論さうではあるが彼の眼光深く自然に突き入つたところにある譬へば短刀を以て直ちに敵の胸を刺るそれである。

○私はコンステイブルの繪を想ふ毎に、自分の觀察が甚だ皮相で、自然を描いて自然の情趣なく、裝飾畫を描いて裝飾的ならず。繪畫と裝飾畫との間をぶらついでゐる、其浮足不甲斐なさを悲しむ。

○私の友は畫室にありとあらゆる風景書を片つ端から出して見せてくれた。そして此の繪は教師が右の木を取り去つてしまつた方が好いとか、茲に強い光線がほしいとか、あすこに道をつけると面白いとか、

云つたとして一々教師の説を私に聞かせてくれた。私は、其丁寧親切な教師の態度はしたはしいと思ふが、其教授振りには一向感服されない。何となれば其教師の言葉から考へて見れば、其人は繪を批評してくれ、るのじやなくつて、繪の作り方を教へてくれるのぢやないか、開發的でなく、注入的である。私等の師に求むる所は、繪の作り方でなくつて、繪の批評である。少くも自分の描かんとする心持に迄突入つた批評がしてほしいのである。私は友に英國の教授振りは一般にさうかと尋ねたら、さうだと答へられた。成程さう云へば、日本の某大家などを糞味噲に云つてゐる或人の繪——其人は風景畫家アルフレット、エーストに就いてる——がやはり其師の如き作りものゝ様なのを見て友の言を信じないわけにはゆかなかつた。

○巴里にゐる我國の美術家の多くは——私のゐた時分の——よく會合はしても、滅多に繪の話や議論などをしない。互にたわいもない話をし



て笑つて別れる。だから繪畫に就いてどんな考へを抱いて筆を執つてゐるのか其作品を見て想像するより外、其人の口からは容易に聞けない。所が英國にゐる畫家はよく繪の話や議論をする。巴里にゐる畫家はサロンに繪を出さうと思つて、描いてゐる人は稀にある位だが、ロンドンにゐる畫家は競つてロイヤルアカデミーに出品しやうとして力めてゐる。場所と空氣とによつて、さうも畫家の氣質が違ふものかと思つた。

四月十一日

リュ・サンゴタールに住むでゐるD君が遊びに来て、明日曜の朝來ないかと云ふ。何かあるのかと聞くと、昨夕方或る女に話して、モデルになつて貰ふ約束をして、明日來るから見に來給へ

巴里のモデル



へと云ふのだ。其モデルに就いてF氏の話が面白い。

昨夕F氏がバルク、モンスリーの附近を散歩してたら、側を通る工女風の二人の女がある。其一人は背も高くつて、姿もよく、顔の形、色も美しいので、あゝ云ふ女をモデルにして何か書きたいものだと思つたが、自分の爲めにモデルになつてくれとも言ひ悪ひし、亦劍突でも喰つては馬鹿らしいので、しばらくもじもじしてゐたが、何當つてくだけると思つて無遠慮に、甚だ失禮ですがあなたは、私の爲めにモデルになつてくれませんかと切り出して、どう答えるかと覗いてゐた。女は唯笑つて何とも言はない。しかし逃も隠れもしないで、一所に並むで歩く。やゝあつて女は、どうして私をモデルにしたいと、あなたは御思ひになつたのですかと聞くから、美しい姿、色の好い膚を書きたいのですと云つて重ねて自分のモデルになつてくれと頼むだ。女は綺麗な人は他にいくらもゐるでしやうから、どうぞ他をお探し下さい、しかししたつて





場 廣 ド ル コ ン コ

してゐる所である。  
ループルよりチュエルリー公  
園コンコルド、コンコルドより  
シャンゼリゼー、シャンゼリゼ  
ーより凱旋門、凱旋門よりボア  
ドブロン迄、坦々たる大道が  
通じてゐる。西はマドレーン  
の大寺院、東はセーヌ河を距て  
て衆議院の建物が聳えてゐる。  
コンコルドの廣場は、直徑約二  
百間ばかり、長方形に形造られ  
てゐる。其中央にはナポレオ  
ンが埃太より持ち歸つた方尖

(一五)

ド  
コ  
ン  
コ  
ル



お望みなら、あなたのモデルにならないこともありませんですが困ることには私は今、或工場へ通つてゐるので暇がないから、甚だお氣の毒と云はれる。ではせめて日曜だけでも好いから、畫室へ來てくださいと云つて、約束したのださうだ。  
全くの見知らぬ人が突然にモデルの交渉をしても一向に不審にも思はず、兎に角話に乗つてくれる。それも同國人同市民なら知らぬ事、人種の違つた白人と黄色人、私は巴里でなければ、到底斯の如くして、モデルを得ることは出來ないと思つた。

(一五)

四月十五日

私はベルナハイムの展覽會を見ての歸りに、よくコンコルドの廣場を通る。此の附近は巴里でも目抜きで、亦最も其美觀の爲めに善美を盡



塔が据えられ、其隣りに大きな噴水盃がある。佛國八州を形取つた女神の大石彫は、廣場の隅々に置かれてある。アルサス、ローレンを獨逸に割取せられて、恨多きストラスプールの彫刻も其内にあるのである。其彫刻の上には、始終花輪や、喪章が捧げられてあつて、旅人をして佛人の痛恨を想はしむ。

茲は目抜き場所であるので、車馬の往來が頻繁である。殊に例の自働車が、前後左右より遠慮もなく疾驅して来るので、路を横切る途中、大にまごつかされるのが度々ある。それ程賑はふコンコルドの廣場も、曾て佛國革命の時分は、斬頭臺は茲に据えられ、日々無數の人々は、頸を刎ねられ、流血は爲めに一週間も、セーヌの河水を赤くしたと傳へらるゝ慘劇が行はれたのである。私は茲を過ぎる毎にダントンや、ロベスピエールの名を想起せざるを得ない。

四月二十日

ノートルダム



M氏と晝食後書室を出て、あてもなく散歩してゐたら、ノートルダムの

寺院の前へ來た。で内へ這入つて見やうかと入口で話していると、職工らしい女が二人通る。口を開けて彫刻を見てゐるM氏の顔がそれに甚だよく似てゐるので、此の人の顔は此の彫刻のモデルの様でしやうと戯れに私は其女に言つたら、二人の女はM氏の顔を振り返りて見て、くすくす笑ひながら行き去つた。M氏は人を馬鹿にしてると怒りながら寺院内へ入る。

私は曾て、ノートルダムの明り窓は、紅黄白紫眩ゆきばかり美しいものだと思つたので、其附近を通る毎に、そんな美しいものが見えないのを不審がつて居た。しかしそれは不審なことでも何でもない。外部よりは光線の工合で、唯すゝけた色の様にしか見えないが、一度薄暗い寺



院内に入れば、蘇生つた様に、五彩の色美はしき大小幾何の窓は、光彩陸離として観者の目を奪ふばかりである。ステインドグラスは、巴里市中到る所で見る事が出来るが、私は未だ斯くの如き優秀なものを見

(一五)



像怪のムダルトーノ

たことがない、或人に聞けばノートルダムステインドグラスの如きものは、其後どうしても出来ないのだそうだ。ステインドグ

ラス以外、ノートルダムの名物は屋上にある怪像である。十六世紀時分の作に懸り、鳥獸を擬人的に取り扱つたもので、ポカンとして市中を見下してゐる鳶や、世の人を嘲けつてゐるかの様な猿や、人形を嚙つてゐる得體も知れぬ怪物や、鳶や、象や様々なものが、屋上の周圍に配されて、市の各方面を瞰下してゐる。茲へ登れば巴里市は一目に見渡され、セーヌの流れも、サクレクルの白聖も、アンヴァリドの金光も指呼の中にある。寺院の前の廣場を歩き來する人、車、馬など豆つぶが動いてゐる様に見える。

巴里の寺院を見て想ひ出すのは、日本の神社佛閣の境内である。塵も止めぬ清らかな境内、老杉古松の森々として生ひ茂れるを見ては、心なきものをも先づ襟を正さしむる。其靜寂な中を歩めば、自らの下駄の音が腸に響くのである。所が巴里の寺院は、老木の以て其威容を添ゆるものもなく、煙突の出た人家に圍まれて、其前は車馬が盛んに音立て

(一五)



て驅る。

日本の寺院は、人の來つて詣ずるに任せ、巴里の寺院は、自ら進むで人と握手せんとす。

(140)

告 巴里と廣



五月一日

町を歩いてると、よく男女の廣告張りに出會する。實際巴里位廣告繪の、到る處にはり付けられてある所はないだらうと思ふ。

一寸普請でも始つて板圍をすると、早速廣告張がやつて來て、瞬く間に一面に色々な廣告繪を張つてしまふ。最も奇觀なのは祭りのある日、大道の兩側に屋臺店が出ると、いつの間にか其周圍には、赤や紫や緑の廣告紙で、一杯に張られてしまうことだ。(茲の屋臺店は、四角な箱の一方だけ口が開いてる様なものだから、電車や

自動車の上から見ると、目まぐるしい程色彩の刺撃を受ける。そう野鱈無精に廣告繪をはり付けるそれを防ぐ爲めに、亦よく巴里の建物の腰には、廣告紙をはることを禁ずると云つた風な文字が、黒々と書いてある。其文字だけ見ただけでも、如何に廣告紙が盛んに張り付けらるるか、察せらるゝ。

廣告引札の盛んなことも一驚を喫する。オペラ附近でも散歩しやうものなら、五歩に一人、十歩に三人、廣告引きがゐて、きつと其引札を鼻の先きにつき付けらるゝ。初めの程こそ一々受取つても見れそれからそれからと強ひられては、其うるさゝに堪へない。亦引札に手を出す人も、ろくに見もしないで、貫ふ側より捨て、しまうので、捨てられた引札の道に散亂してること夥だしく、靴に踏まれ、泥に塗れて甚だ見苦しい。

夜の電燈廣告は、晝間の雜風景なものに比して遙かに好いものだ。五

(141)



915  
H38

色の色が消えたり点いたり、或は走馬燈の如くぐるぐる廻る、散歩して  
足元に突然明るく文字が寫つて喫驚することがある。活動寫眞應用  
の廣告の前には、觀者が群集してゐる。  
美しい電燈廣告は、巴里の夜に相應しいものゝ一つである。

(131)

# 巴里繪日記終

明治四十五年七月四日印刷  
明治四十五年七月七日發行

(巴里繪日記)

定價金壹圓

著作  
所有

著者	橋本邦助
發行者	大橋新太郎
印刷者	水谷景長
印刷所	博文館印刷所

發行所

東京市本橋區  
本町三丁目

博

文館

振替貯金口座東京二四〇番  
販賣部電話本局二六二〇番



吉田博先生著並畫

(原色版二枚寫真版十二枚入)

寫生  
旅行

# 魔宮殿見聞記

全一冊 菊判上製  
紙數 四百二十頁  
正金 九拾錢  
小包料 金八錢

●魔宮殿の傳説は現代驚かす南歐の特殊思想を代表せり

歐羅巴文明の今日に於て西班牙半島には魔宮殿と稱すべき奇怪の遺蹟あり其建築は今日迄も一種の不思議にして其傳説はアラビア族の榮華の夢は柘榴の花の如く散り去りしも其魔術の呪の下に立ちたるアルハムブラはシエラ、ネバダの雪と共に永へに亡びざるなり著者は第二回歐米漫遊に於て此宮殿を訪ひ滞在日久しく其建築裝飾より附近の小景に至る迄具々に之を寫生し且つ口碑に残れる數多の傳説奇話を網羅して寫生記事の條下に之を挿入したれば美術上歴史上の讀物として興味深々たるのみならず一傳説一奇話のみを取りて之を少年少女に對する御伽噺とするも確かにアラビヤン、ナイトより以上の興味あるなり

●魔宮殿の寫生畫代第一流の洋畫家吉田自らの提供せる逸品なり

# 永井荷風著 あめりか物語

全一冊 四六判 體裁瀟洒  
紙數 三百九十頁  
正金 六拾五錢  
郵税 金六錢

内容  
○船室夜話 ○春と秋 ○野路のかへり ○雪のやどり ○岡の美上人 ○悪林 ○醉美人 ○舊恨友間 ○曉一月一日 ○市俄古の二日 ○夏夜の酒場 ○六月の夜の夢 ○支那街の記 ○附録 ○フランクスより○のほとり ○ロイン河

# 田村松魚著 北米世俗觀

全一冊 三六判 體裁瀟洒  
紙數 二六〇頁  
正金 參拾五錢  
郵税 金四錢

萬朝報評 筆を不用意にやりて縦横に米國の風俗を寫す、齒切りが好くて讀むに小氣味よし、風俗管見には靴、外套、握手、喧嘩、調停の短文を列ね、種々の細かい紹介各趣あり、著者がインディアナ州の溪流の畔に試みたる「天幕生活」の寫生文、氣まぐれより始つて慘事に終るまでの情景頗る色濃く、簡なる家庭は油繪の如きグリーンキヤツスル町の銀行家の一家を寫して小説の如し、其他「桃の實」「在米同胞の勞働生活」「在米の日本青年」の三篇の如きは渡米者の豫め是非讀んで置くべきものなり

10  
72  
383

10  
70  
330

915  
H38



田村松魚君著

# 北米の花

全一冊洋製菊判  
表裝華麗美本  
正金壹圓拾錢  
小包料金拾貳錢

萬朝報評 「前略」卷首の「野調」は米國加州の日本殖民地に於ける遊放的生活を描きたるものに  
者の感慨を極めて新しく且つ眞率にあらはしたるもの、薄倅の詩人が現世から離れて温き同情を美しき  
野鳩の死に寄せながら涙ぐめるあたりは肉慾的作品ばかり多き當今の文壇の思潮と趣を異にして珍  
しくも又嬉しき心地す、第二「出世間」は伊太利種のマンドリン弾きの美少女と日本一青年との戀物語を  
描きたるもの、第三「新知人」は米國紳士の日本婦人觀、第四「日記の餘白」は外遊した文士の所感を描き  
たり要するに北米の花は著者が久し振りで現はるゝ日本文壇に新生面を開かんとする第一聲として高  
き調子の響きを發したるものなり。

文學博士 姉崎正治君著

# 花つみ日記

全一冊四六判函入美本  
寫眞版四十餘枚入  
正金壹圓參拾錢  
小包料金八錢

南伊太利の美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇、それが中  
に湖畔の佛誕會に異國の友を會して、佛教を語り、ロマの寺院に聖教會の生命活動を視察し南歐に北歐  
にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然美術の記録、宗教文明の評論として、江湖の一讀を薦む。

巖谷小波君著 久保田米僊畫伯製

# 新洋行土産

全二冊新形中判洋布  
金模樣入體裁瀟灑函入  
正各壹圓參拾錢  
小包料各八錢

先に伯林二年の觀察を洋行土産二卷に現はして、爲に洛陽の紙價を貴からしめし著者は此度渡米實業團  
に加つて在米三月間の見聞を、新洋行土産として發表す、著者が銳利なる眼光と輕妙なる筆致とは、世  
已に定評あり。而して彼の實業團の渡米や亦本邦空前の舉なりとす、本書他の外遊記に比して光彩を異  
にせるもの素より論を俟たざるべし。

田中湄人君著

# 最新倫敦繁昌記

全一冊中判上製美本寫  
眞版十二頁入紙數七百卅頁  
正金壹圓  
小包料金八錢

大阪毎日新聞評 神戸又新の倫敦特派員たる著者が一種奇警の觀念と輕妙洒脫の筆致を揮つて倫敦  
の表裏兩面を縱横無盡に活寫せる通信を編次して一卷となせるなり、本書に於て最も取るべき處は忠實  
によく倫敦の各種の社會を描寫し恰も一幅のパノラマを眼前に展開せるが如き觀あらしめたる所にあ  
り倫敦案内記としては蓋し其優なるものゝ一に算ふるを得べし、卷末に渡邊小城氏の趣味あるハカヤ便  
りを附す。

915  
H38

329



915  
H38

2182  
1/2

# 漫 畫 と 紀 行

(著 君 醒 未 杉 小)

輕妙洒脫るな漫畫二百三十個外にアート寫真版八頁挿入

## 次 目

伊豆繪師	上毛嶽の秋	御嶽詣	木曾路	通夜記	春の日の	變勇十五	書生十五	狩十	漫畫八十六	盜畫十五	春興十	怪十	漫畫十二ヶ月	同中觀笑以下九圖
------	-------	-----	-----	-----	------	------	------	----	-------	------	-----	----	--------	----------

全一冊洋裝菊判上製美本  
紙數三百三十五頁

正價金八拾錢  
小包料金拾貳錢

發行所 博文館

方今漫畫界の泰斗と稱せらるゝ小杉未醒子は、久しく其作中の氣に入つたものを精選して、一冊の書からしめんと計畫せり、而して滞りなく出版されたのが此書にして、脱俗超凡輕妙雅致の漫畫數百種を網羅せり、加ふるに漫畫相應の紀行文を添へたるは、蓋し錦上の花とも謂ふべきなり、乍去百聞は一見に若かず、食はざる人に其味の如何を問ふを休めよ、無用の贅辯いふ丈け野暮、敢て江湖の諸士に對して、此の珍友を机上に備へられんことを勸告す。



915,6

H38



